

淨土

四月號



昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十四年三月廿日印刷
昭和十四年四月一日發行

第五卷 第四號

◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために身命を賭した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院
慰問

白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります。

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務部宛に！領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜

淨土宗務所

東京芝公園一丁目

振一替五口一座一東一京番

品製研理

健康の安全地帯

朝夕一球宛の

「理研ビタミン」で……

風邪をひかなくなる
結核を防ぐ力がつく

見よ！この力價！

理研ビタミンは純粹のビタミンAとDを服みよいグロビニール球に包んだ強力製品です。一球中に七七〇〇國際單位、すなはち鰵肝油二十五分のビタミンAを含有し朝夕一球宛の常用で斷然抵抗力がつき、呼吸器が強化され、風邪をひかなくなり結核も豫防される。國民體位の向上に理想的營養劑として推賞される。



理研ビタミン
(包裝)

四十球入 百球入
五百球入 千球入
婦人子供用小粒製品
五十球入 一、三〇
百球入 二、五〇

店商置玉 社會式株 阪大京東 店理代總



◇浄

土第五卷 第四號

四月號 目次◇

表紙・扉繪

熊倉鎮雄

目次カッ

川村良孝

特輯 法然上人

法然上人と現代

椎尾辨匡(一六)

勢至丸の出家

倉田百三(一八)

ひたむきに求めゆく聖

中村辨康(二三)

浄土開宗

江藤澂英(二六)

迫害し得ざるもの

友松圓諦(三三)

紫雲たなびく日

佐藤賢順(四四)

江戸の法然上人

松本龜松(四四)

七彩の浴身(岡本かの子女史)

生田花世(五一)

信仰相談

中村辨康(五七)



信仰座談 佛教の立場を語る……………浄き友の會(四〇)

叢話 圍碁談義……………袋井寛(三五)

實話 馬造の出世……………佐賀一海(三〇)

隨筆 二つの物語 吉田絃二郎……………(三六)

現地だより 岩嶺山上の月……………中野隆雄(三六)

浄土讀者の會……………(三八)

歌壇……………與謝野晶子選(三七)
俳壇……………太田耳動子選(三三)

日常勤行式解説講義 正信への願望……………中村辨康(三九)

浄き友の會だより……………(四二)

鑽仰會支部だより……………(四七)

編輯部だより……………(五五)

◇浄土 第五卷 第四號 四月號 目次◇

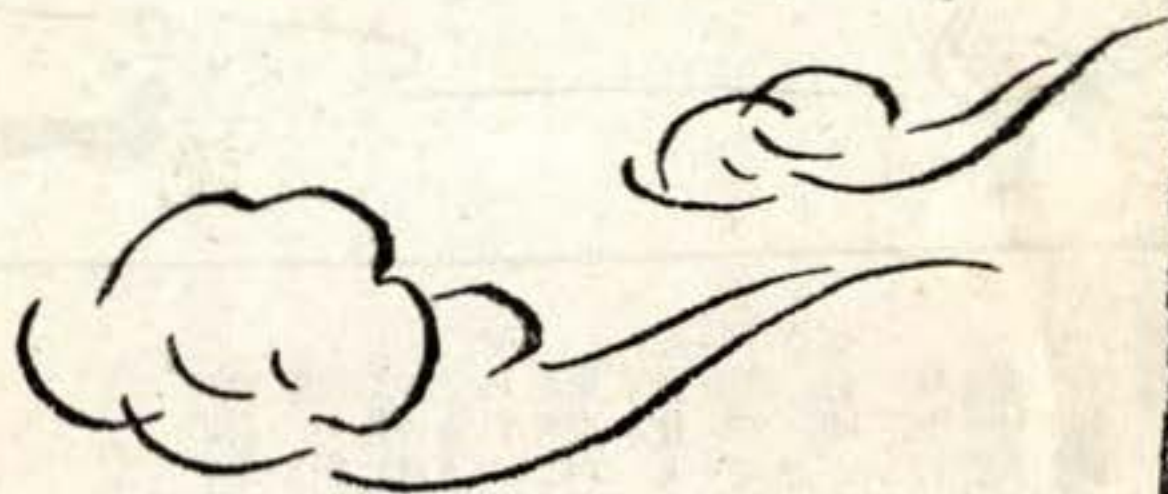
館會照明園公芝·芝·京東
七八一二八京東替振

釋尊の在世に
あはざることは、
かなしみなりといへども、
教法流布の世に
あふことをえたるは
これよろこびなり。

法語抄三

浄土

四月號





法然上人と現代

文學博士 椎尾辨匡

支那事變は漸く破壊より建設の時代に入りました。

即ち折伏より攝受の大精神に目醒むべき時節になつて來たのであります。

最近東亞再建の問題がやましく論ぜられてゐるのはこの事でありまして、我が日本國民に課せられた重大責任であります。

東亞再建或は興亞と言ふ事は結局支那大陸をどうすればよいか、友邦支那四億の民衆を如何に教化したらよいかの問題であります。

即ち支那の人々にも我々日本國民にも、眞に諒解しうる精神的共調が進められる事、言ひ換へれば、支那を導くべき日本の進むべき大道を發見する事でなければなりません。

支那は文化の歴史より見て、はるかに日本の先進國である事は御承知の通りであります。東亞再建の指導力としての日本は、支那の文化を再認識する事が大切なのであります。

即ち更めて、我々は支那に捨てられてある文化の實を拾ひ集めねばなりません。道教、儒教、佛教、それらは代表的な文化の主流であります。就中支那佛教の日本文化に及ぼした影響は絶大なものであります。

特に日本佛教の眞の日本的性格を發揮した宗派は法然の淨土教である事は今更言ふまでもありませんが、その淨土教が如何なる系統によつて傳へられたかと言ふ事を考へてみなければなりません。

支那に於ける淨土教の大成者善導和尚の偉大さを見出したのは世界廣しと言へども我が法然上人唯一人であります。

そこにこそ法然の偉さがあり、友邦の善導と我が法然が二人一體となつてゐる所に淨土教の尊さがあり、法然の現代的意義があるのであります。

×

特に法然は善導が人間を人間としてみる觀方を稱揚され、そこに善導の偉大さを發見したのでありますして、法然の觀察力の鋭さがあり、法然の現代性、民衆性が見出さるのであります。

今迄日本に行はれてゐた天上的、貴族的、聖道自力の佛教に對して、地上的民衆的自力易行の淨土教を唱道した所に法然の宗教改革者としての眞骨頂があるのであります。

法然上人と言ひますと、天上びとの様なにほいが致しますけれども眞實法然の面目は、天上びと或は三朝の戒師であつたと言ふよりはむしろ草履をはき、墨染の弊衣に身をつゝんだ、えぼしいも着ざる法然房の方に躍如たるものがあるのであります。

勅修御傳などには、法然の弟子となられた人々には當時日本の高僧碩學が多い様に傳へ、八宗兼學の智慧第一の法然上人と傳へられ

てゐますけれども、それは傳記が、いらぬ面ばかりを強調したものでありまして、我が法然の眞の姿は愚痴の法然、えぼしいも着ざる法然にあるのであります。

×

己を眞實に救ふものは經文にも行にもないとし、智慧、學問、修業の上に己を見ず、本來無智の姿に還る事を主張され、若し我れの救とすべきものありとすれば、それは大いなる佛の誓願、大慈大悲の彌陀の本願でなければならぬと大悟されたのであります。

それは行も、智も、悟りも尊さもない。それ自らに何のとりえもない自然人の姿を見出し、そのありのままの身を御佛の大慈悲の御前に捧げるのであります。

赤裸々なる我が身をはつきりとみつめ、無力なる己が姿を把握する所に彌陀の本願におすがりする自然法爾の眞實の心境が顯れて來るのであります。之が淨土の安心であり、聖法然への鑽仰であります。

×

時局はいよく重大を加へて參りましたが法然上人が鎌倉戰亂の時代にあつて、人心の動搖を安定せしめ、宗教の上に於て日支の提携をもたらしした事に思ひ到れば、今更乍ら法然上人の偉大さが偲ばれるのであります。



勢至丸の出家

倉 田 百 三

勢至丸はその日も村の童子たちと弓を射て遊んでゐた。父から賜はつた竹合の弓に萩のわりはさみの矢をもつて得意になつて的を射た。誰れよりも圖抜けて上手であつた。

「和子様はおゑらいな」

小者の六郎は矢を拾つて來ながら小さな主人をほめた。

「わしは大きくなつたら、主馬頭になるのぢや。馬に乗つて重藤の弓を持つて」

「ほんにそうならせられ。和子さまの初陣の時は凛々しからうな。緋おどしの鎧を着けて。」

「いや、わしは朋黄ぢや」

「これもよかる。その折は六郎は白い幡をかついで従いて行きませう。源氏は白幡ぢや」

「白幡と云へば、六郎。あの棕の樹には白幡が來てかかつたといふのはほんとうかや」

「ほんたうでござります。私は此の目で見たもの」

と六郎は得意になつて、

「恰度和子様御誕生の夜明け方ぢやつた。虚空に妙なる鈴の音がしたかと思ふと、何處からともなくさつと白幡が二た流ながれて來て梢にかかり、色々の光が輝きました。やがて産湯をおさせするうちに天に昇つて、西の方角さして消えてしまふた。が、ずつと後まで異香がただよふて居りました」「奇瑞やなあ」

と童子たちは棕の大樹を仰いだ。夕陽が赤々と一ぱいに梢を染めてゐた。西の空も黄色い夕雲がくづれて神秘的な光を含んで見えた。

勢至丸は凝つと西方の空を見つめてゐた。

ずつと幼いときから勢至丸にはそうした癖があつた。西の空に何かあるような氣がした。西側の壁に向つて長く黙つて坐つたりしてゐた。

勢至丸の母は秦氏であつたが、その弟の得業は菩提寺の院主で、父時國の邸へよくやつて來た。その度びに、彼は勢至丸の惻愍さうと、

不思議な生まれとに目をつけてゐた。

「勢至、そなたはそんなに精出して何して居るのぢや」

叔父の聲に初めて氣がついて、ふり返り、

「佛様をこしらへて居るのぢや」

と土まみれの手を合はせて、こしらへた佛體を拜して見せた。僧衣の叔父はおどろいて、

「いかさま、よい遊びをおしやる」

「叔父様、あげる經を教へてたまはれ」

「よろしい、ではついて申して見なさい。南無西方世界」

「南無西方世界」

「觀音勢至菩薩」

「觀音勢至菩薩」

「そうぢや。惻愍な子ぢや」

得業は勢至丸の頭を撫でてにつこりした。が

ふと母親が夢に剃刀を嚙むと見て此の子を懐胎

したことを思ひ出した。

「この黒髪と剃刀と」

彼は僧侶らしくそう聯想したが直ぐに打ち消した。何故なら漆の家は家運榮えて、父母とら



全

健やかに、稻岡庄の預り所源内武者定明でさへ。

兎角駈され勝ちな程であつたから。

久米の押領使漆家の裔である時國と、龍口の武者の流れである定明とは互いの武門の誇りの

ために心の内に角逐し、懺悔の火むらを燃やしてゐた。土著の勢望ある時國は官録の威をた

のむ定明の下知に従はうとしなかつた。

妻の秦氏は柔和な、愛情の深い女性とて、兩

家の確執を心に憂へた。

「兩家の不和は此の久米の郷の禍ひの因でござ

います。我慢は身を滅ぼす元、一日も早う御和

睦なさいますように」

「なあに、源内武者如き渡り者が、神戸の太夫

以來の漆家の勢力に刃が立たうや。今に向ふか

ら折れて来るに相違ないわ」

折から弓矢を持つて外の遊びから駆け込んで

來た勢至丸に、

「どうぢや、勢至、源内武者にそなたは後れを

とるか」

「何しに。」

と云ひさま、勢至丸は矢をつがへて、ひより

と射た。矢はぶすりと帷の武者繪の面を美射貫いてゐた。

「美事、美事」

と父はほめた。

その夜半の事だ。嵐のように不意に四、五十騎の一味が襲つて來た。七、八騎は雨戸を蹴破つて武者鞋で座敷に踏み込んで來た。

「定明だー」

父が顔色を變へたのを勢至丸ははつきりと見た。不意打なので備へは無かつた。居合はせた郎黨が立ち合つたがバタ々と仆された。

時國は側にあつた弓を取つて二、三騎を射ち殺した。次いで寄つて來た武者を太刀を抜いて斬りつけやうとする途端、敵の矢が時國の額に中つた。

「あッ」

と倒れかかる際に、敵の太刀先が脇腹を突いた。

まだ九つの勢至丸は物陰に身を忍ばせて居たが、ふと戸の隙間から見ると、定明が庭に立つて下知してるのが見へた。憎悪と敵意に充ちたその顔。勢至丸は殆ど無意識に矢をつがへて、その顔を狙ひ打ちした。矢は定明の眼に中つた。

定明は仆れかかつて郎黨に支へられた。致命ではないが、痛みは激しく、彼はもう下知に堪へなかつた。物音に立ち合ふ一族はあり、それに時國は仕止めたと思つたので、一味はそれをしほに引き上げた。時國はもう盡の息で、勢至丸と母とは左右から寄りすがつてゐた。

「お氣を確かに。敵はもう引きましたぞ」

時國はもう諦念の顔をかためてゐた。

「深手だ。もう立たれぬ」

「父上、驢は屹度討ら取りますぞ」

勢至丸は子供心にも必死になつて父の耳元にかう叫んだ。と憎悪と瞋恚とがむら／＼湧き上つて來て、菩提寺で見た羅刹のやうに、定明の五體を引き裂きたいやうな衝動を感じた。

と瀕死の父のかつて無い、柔和な聲がひびいた。

「驢討は無用ぢや。あだはあだを生んで絶える時はない。わしは今こそその因縁を悟つた。」

周りの者は皆思ひがけない時國の言葉に、胸を打たれてしんとなつた。

「思へばわが先祖式部太郎が陽明門に藏人兼高を殺して、此の美作の國に流れて來た時もう今日の業果を結んでゐたのぢや。定明との我慢の確執、かくて我れは定明に討たれ、我子は定明を討つなら、定明の子は又我子をねらふであらう。かくて怨讎の盡きる期はない。わしは熟々と浅間しうなつた。」

定明の聲は痛手と弱まる息に一度杜絶へた。がやがて何か強い、美しい光に觸れたやうに、靈的な、ひびきを帯びてつづいた。

「人間の知見はとどかぬ。榮枯は浮雲のやうに果敢ない。武威も亦たのまれぬ。勢至、そなたは佛の智慧を學べ。弓矢を捨てて僧門に歸す

るがいい。そして恩讎を越えた不滅の法を究めて、人と世との救ひのためにつくせよ」

勢至丸は父の言葉が切なく、強く胸の底にこたへた。何とも云へない悲しい尊い氣がした。胸の内の瞋恚の焰が水をかけたように一時に消えてしまつた。そして何か高い、美しい、限りないものがそれにかはつて胸を充たした。

「勢至、そなたは佛道を究め、聖となつて、此の父のたましひを濟度してくれ。わしは、驕慢殺伐のため身を亡ぼし、死後のたましひは何處にさまようか、心元ない。僧となつて父の菩提をとむらうてくれ」

「父上、解りました。私はお寺へあがります。叔父様のように、お經をならつて、僧になります。それゆゑお心安う……」

勢至丸は胸が切なくてただこれだけやつと云つた。涙がぼと／＼落ちた。

父はふるふる手を伸ばして勢至丸の頭を撫でた。

「いまはの際の美しい御發心、うれしく／＼ございます。勢至丸は御遺言通り、屹度出家致します。日頃から沙門の氣さし何となくたまたま此の子のこと故屹度名知識にもなりませう。此の上はお心安う御最後を……」

母は流石に武門の妻らしく取り亂さずに、ひたすら臨終の正念を祈るのであつた。

時國は背いて、靜かに目を閉ぢて、

「南無觀世音菩薩」

と一聲唱へて、息を引きとつた。

定明の方では復讐の手の寄せるのを待ち構へて居たがその事は無かつた。

勢至丸の心は定まつた。佛の道へ。それは初めから、種が土に相應してゐるように、彼の素質にはまつてゐた。彼は棕の老樹の下に座つては、叔父の得業から教はつた經の一とはしを誦へた。

「南無西方世界、觀音勢至菩薩」

すると夕陽雲の凝つてゐる西の空が佛のゐます國、父のたましひの安まるべき土といふ氣がどうしてもするのであつた。

「西の方、西の方」

九つの童子の胸の底深くその限りない思慕の方角は此の時すでに選ばれたのであつた。

叔父の得業は時國の遺志にしたがつて、勢至丸を出家させ、名知識に育てあげねばならぬと心を砕いた。

「この稀有の法種はわしなどの鉗植するにはたうとすぎるわい」

二、三の經文を教へて見て舌を捲いた得業はかう呟いて、母の所に來て、しきりに勸説した。

「比叡山に一日も早く送つて、本格的修業をさせることぢや」

母親は期しては居たものの、流石に遠く亡き夫の忘れがたみを手放すのは辛かつた。

「母上、私を觀山へやつて下さりませ。父上の御遺言耳に残つて、夜も晝も忘れられませぬ。今恩愛に引かれては永日の悔いになります。叔父上に教はつたお経にも

棄恩入無爲是眞實報恩底

とございます。山に登り、知識となつて、母上諸共、あまねく衆生を助けたらございます」

出家修道のたくましい志はその目に眉にあふれてゐた。母親は靈鷲のやうなその威に打たれた。そして涙を押しかくして言つた。



ひたむきに求め行く聖

中村 辨 康

凡そ信仰に入らうとする者は、ひたむきに道を求め求めて行かなくては「ほんもの」にはなれない。

本當に眞摯な生一本な氣持で「これは」と思つた道をまつしぐらに突きすすむべきである。

途中で傍觀をしたり小休みしたりするやうでは、折角入口近くまで行つても逆戻りすることになつて仕舞ふ。

「比叡へおいで。勢至丸。一人出家九族生天とやらも聽いてゐる。佛果を得るまでは、決して山を下つてはなりませんぞ」
そして愈々比叡の西堂、北谷、持世房源光が許をさして、勢至丸が旅立たうとするとき彼の女は一首のかたみの歌に恩愛のなやみを托して、愛兒に興へた。

かたみとしてはかなき親のとど、てし

この別れさへまた如何にせん

(一九三九、三、六)

車坂へ引き上げるのに、初めは一生懸命になつて曳いても、若し途中で手を離せば、車はズルズルと一遍に坂の下までずり下るであらうやうに、道を求めることも、途中で意氣を感じたら、また元の本阿彌に歸つてしまはしないにも限らないのである。
何事でもさうであらうが、殊に信仰上に於ては此求道時代のゆるみたるみほどこいけないものはない。



信仰に入る入らない
の鍵は一に此處にある
のである。

「樹をきらんには頻り
に斧を下さざるべから
ず」

と云ふ善導大師の言葉
もあるやうに、一と度
これと定めたならば
「一以て之を貫く」と
ころの精神が必要であ
る。

何宗の祖師方でも此
點に關しては何れおと
らぬ熱烈な求道者であ
つたが、別けても日本
淨土教の創始者である
法然上人は誠に稀れに
見る不撓不屈の求道人
であつたのである。
九歳の時、お父様の

遺言を小さい胸に抱きしめて佛教を學び初め十三歳の時、其當時の
最高學府である比叡山に登り、十八歳の時、更に隱遁して黒谷の法
恩藏に籠つて獨學研鑽すること實に足掛け二十八箇年、其間近畿地
方に散在する各宗の碩學を訪ねて、夫々奥義を叩いたが「萬人共に
救はれる道」を發見することが出來ず、再び黒谷に還つて四十三歳
の春三月まで求めに求め抜き、究めに究め抜いた其永い「求道生
活こそは、他に類例を見ない熱烈なもので、遂に今まで「信」と
「悟」とを混同して居た舊來の佛教を見直して、純粹の信仰的佛教
としての新意義を樹立したのである。

無論それ以前にも信仰的なものがあるにはあつたが、それは要す
るに「現世安穩」を願ふに過ぎなかつた。

天災地變から遁れ、病氣から遁れ、災難から遁れ、困苦から逃れ
やうとした末世的な神經衰弱的な逃避的な信仰に外ならなかつた。

恰度今で云ふ類似宗教と大同小異のものに過ぎなかつたのであ
る。

魂の永遠の救ひなどは及びもつかなかつたから、せめては現實
を享樂しやうとするところの刹那主義に陥つて居たのである。

例へば「授戒」と云ふやうなことも、生活を肅正して人生を完
しようとする眞義が失はれ、唯だ災難のふりかゝらぬやうに、或は
病氣が早く直るやうにする一種の「お祓ひ」であり、御祈禱であ
り、おまじないであつたのである。

九條兼實公の「玉葉」には「授戒の戒師も元はよく効いたが、段々世が末になつたのか功驗がなくなつた」と云ふやうな意味の事が書いてあり、また兼實公の北政所が風邪を引いたので、法然上人に来て貰いて「授戒」をして貰つたことなどが記してあるのを見て、如何に其當時の人々が迷信的な信仰の中にとちこめられて居ても、本當の正しい信仰を理解して居なかつたかを知ることが出来るのである。

かう云ふ時代思想の中に居り、かう云ふ先入主の中に居たのだから、信仰に依て「生死解脱」が出来ると云ふ確信ある宣言を發表することは餘程の求道心と充分な體驗とがなくては出来ないことであつたに相違ない。

だから法然上人が求道生活三十五年に亘る永い年月を経なければならなかつた、其苦心慘澹に對して私達は満腔の敬意と感謝とを捧げざるを得ないのである。

少くとも黒谷隱遁の十八歳から立教開宗の四十三歳までの二十六年間は、普通ならば人生の中の最も花やかな、元氣發洩たる年頃である。

殊に一寸小高い山へ登れば、絢爛たる「京」の町の燈火も見えるのである。春は若人の血を躍らす時季で、紅燈綠樹の影には蠱惑的な甘酒も待つて居ようし、妖艶な舞姫も手をさしのべて居よう。若い公達の浮かれ姿を想像するだらうにも偶々羨やましきの起らない

筈もあるまい。

夏はまた下界では鴨川の夕涼みのそよ風に吹かれて柳の糸の心は亂れて、誠に浮世戀しさのいや増す折である。如何に精魂を盡して勉強にいそしんで居られても、人間の緊張には限りがある。勞れた儘に藥師堂や大講堂あたりまでせろ歩きしたこともあるであらうし四明が嶽へ登つたこともあるであらう。そして八瀬大原などへ降つたこともあるであらう。人は人なつかしいものだからである。

殊に秋にもならば獨居生活には淋しさが一入いやまして人なつかしい思ひのしない筈はない。非業の死に斃れた父君への追憶、淋しくも獨り残り居給ふ母君への思慕、人の子として親しい人達がかしく偲ばれるのは誠に當然である。

況して牙え渡つた月の夜半に、寝られぬまゝに窓をあけて、西方作州の空を思ひやる時、轉た哀愁の念の湧かぬ事があるであらうか。何れにせよ、まだ若い身そらである。故郷忘れ難き感情の、幼な友達の身の上など、その越し方行末を幾度か、憶ひやり想ひ過したことであらう。

またふる雪に滿山、悉く眞白となる頃は、淨も不淨も皆一色に塗られて、自然の景色の差別のまゝに、しかも平等一味の美しさを現じ行く姿を眺めやつて、人間萬差の如何に憫み多く苦み多きかを反省しつゝ、深い沈思の中にとち籠められた時もあるであらう。

さり乍ら求道の一念發つては火となり炎と燃えて、時には競ひ起

らんとする妄念を拂ひのけつゝ眼を聖教にさらし想ひを佛智に走せて、ひたすら我人共に救はるゝ道なきやに腐心せられた其精進こそは、誠に宗教的天才ならざればなし得ぬことである。

勅傳に依れば師匠の觀空上人から「法爾自然に道を求めた聖である」とのことで「法然房」と云ふ名を貰つたと傳へて居る。大體の動機はお父様の御遺言に基いて居ると云ふものの、何分にも九歳と云ふ幼い年少であるから、如何に宗教的天才であられても、思想的にもまだ熟して居られなかつたであらうし、人間生活上の苦勞も充分嘗めて居られる筈がないから、其時は唯だ非業の最後を遂げられたお父様との別離の愁しみと、言ひ遺された佛教への志望とがあつただけで、本當に「生死解脱」と云ふ人生上の大問題に對する痛切な求道心が起つて居た譯でもなかつたのではあるまいか。

之は誠に云ひ過ぎで法然上人に對する一種の冒瀆であるとの御叱りを受けるかも知れないが、無暗に祭り上げるよりも「人間法然」として味つて行く方が何となく親しみ易いし、一面にこの「法爾自然の聖」と云はれたことなどを思ひ合す時、やはり十五歳で縁の黒髪をおろし、皇圓阿闍梨に「せめては基礎學たる三大部を學んでから隱遁してもおそくはあるまい」と云はれた頃から、段々求道の念が熾烈になつて行つたものと見たいのである。

無論觀山三千の學徒の現状が、多くは榮達の爲に究學して居たことにも、あきたらなさを感じて居られたであらうし、またお父様の

御遺言が深く心に喰入つて居て、それが段々生長して來たことでもあらうが、本當に火の玉のやうになり増さつて行つたのは、十六七八歳の最も純な氣持の盛んになつた頃からではなからうかと想像されるのである。

之は別に根據がある譯ではないので、一個の獨斷に過ぎないから或は誤りであるかも知れないが、宗教心理學の教へる處に従へば、そんなやうにも考へられるのである。

私は嘗て「法然上人の信仰生活」の中に上人の求道生活を五期に分けて考へたことがある。單なる私見であるけれども、九歳から四十三歳までの三十四五年と云ふ長い年月の間に進化和云ふか生長と云ふか、幾多の心的過程を経られたであらうことは想像に難くないのである。大概の宗教人は三十臺で確信を發表したり宣言したりして居る。之も宗教心理學で統計上入信期として指示して居ることである。法然上人も「百因緣集」などには「三十三歳の時、往生淨土の教門に入り出離生死の信を堅くした」由を云つて居る。之が正しいか何うかは判然しないとしても、假りに、さうした事が傳へられて居り乍ら、其後十箇年と云ふ年月を経て四十臺になつて、始めて立教開宗せられた事は、誠に稀れに見る求道者でなくては出來ないことである。

謂ゆる天衣無縫の圓融なる御人格が然らしめたのであらうか、それとも亦た「智慧第一」とまで推奨された深い／＼觀智から、充分

の上にも充分の思索と體驗を重ね、確信の上にも確信を重ねられた周到なる用意が籠められた結果でもあらうか、何れにせよ、この長い求道生活こそは他の宗教的天才人とは類を異にして居られた事がよく判るのである。

「なげきなき經藏に入り、かなしみかなしみ聖教に向ひ」

と御自分にも述懐なされて居るが、このひたむきの求道心は立教開宗なされたのちにも續いて居られるのは實に恐れ入つた事である。

即ち勅傳に依れば立教開宗された九年後の五十一歳の時、木曾義仲が京都へ亂入した其日一日だけが「聖教を見なかつた」と御自分でも云つて居られるのであるが、それは最後まで毎日毎日聖教に親しんで居られたことを證明するものであり、また實踐の上にも毎年正月の恒例の「別時念佛」を始めとして時々別時念佛を行つては信行策勵に資せられた事蹟などを拜讀しても、如何に求道心が熱烈であつたかを證據立てて居るのである。

かう云ふ觀點からすれば、法然上人こそ一生涯を盡くしてひたむきに求道の心を捨てられなかつた方であると云つて云へない事はなと思はれる。

かゝる一生を貫く求道心は決して偉大さを振付けるものではない。イヤ逆に却つて上人の御人格の偉大さを知る資料であり、御人格の偉大さに驚歎する材料である。

宗教的天才たる上人にして尚ほ且つかくの如くひたむきに求道せ

られたのである。況して私達のやうな暗愚なものが求道心を捨てるやうな事の許さるべき筈はない。

願うらくは私達も法然上人の教に依て一度信に入り得た上は「我が信、成就せり」と高くおさまつて信行を怠慢して居てよい道理はないのであるから、愈々益々信仰を策勵して求道に精進したいものである。

それに付けても私達は幸せ者である。法然上人の長い「求道なかりせば、信仰に入ること出来ず、人生を喜ぶことも出来なかつたのである。この報恩の一事だけでも、一生ひたむきに道を求め行かなくては誠に相濟まぬ次第である。

ひたむきに求め行かれた聖者！

兎もすれば意け勝な此の魯鈍な私達の上に慈眼を垂れ玉うて、愈々求道に精進の出来得るやう、加被護念し玉はんことを祈りたい。

信仰坐談會案内 (來聴歡迎)

日時 四月二日(第一日曜)夜七時ヨリ(第廿回)
四月六日(第三日曜) (第廿一回)
四月廿三日(第四日曜) (第廿二回)

場所 本郷區東片町七八橋本榮樂方 (美容大學院)
(市電白山上下車 電話小石川四九七六)

講師 中村辨康先生

講題 阿彌陀經講義 (第一回目第二回目第三回目)

三月を以て心經講義八回を以て終了し本月より新たに阿彌陀經の講義を開始いたしますから是非御誘ひ合せ御來會下さいまし



潮曇る朝空暗し暴風の警報化し波止場越す浪

小樽市 中村 茂 舞

わが胸に君が言葉秘めしよりかなしき心消ゆる時なし

大阪市 細 木 隆

評 戀をするものは相手の一寸した言葉のはしにも悲喜の感動を大きく受けるものである、戀に敏感になつた作者の息吹がそのまゝ一首によく盛られてゐる。

東京市 三浦 潤子

歸ちかく朝朝きなくぐひすに戸を開け放ち水仕するかな

評 まだ春寒の頃で戸を開放して水仕事をすると時節ではないが、歸ちかくの樹になくぐひすの姿を樂んで作者は寒さを忘れないのである。

朝鮮 蟹江 八年坊

十一年病めるこの身にみ佛の大悲の道はまこと尊し

山形市 佐藤 壽 來

人をも今日はうとまれにけり

北海道 渡邊 信次

夜は明くれどあけぬ心は今日もまたひとり悲くし物思ふかな

北海道 花田 順住

大君にささげしいのちながらへて歸り来る身を迎へけるかな

長野縣 宮澤 榮子

夫征きて去年も今年もつつましく松の内をば兒等と過ぐせり

埼玉縣 小濱 清秋

その言葉かへし得ぬまで他人のとがあばきし心のちに寂しき

千葉縣 安田 保治

戦死せし友憶ふかなそのかみの戦遊びの夢にさめつつ

北海道 中村 もん

大漁の鰯のたより故郷へつたへてなごむ春の日盛り

堺市 木全 潤子

みいくさに笑みつつ征きしますら

をの御靈を迎ふ今日ぞかなしき

神戸市 秋田 里二

おもひつつ墨するひまの嬉しさよ書を習はばや心澄むまで

新宮市 奥村 映水

来て見れば今を盛の梅が香に立ち去りかねてしばし佇む

京都府 郡司 島誠也

肌へさす寒さはあれど春立つと聞けば心の明るき朝

近衛歩四 押野 孝悦

吹く風に薄の原はさやげども梅の老樹は動かず立てり

京都府 舟貝 利吉

冷凍魚食む喜びを書きおこす戦地の友の無事を祈るも

大阪市 渡邊 明道

病みふしていくさのにはを偲びけり雨の夜いかに友はあるらん

香川縣 荒木 はち

國のためつくせしいさをしのびつつしらきの箱をひたすらをろがむ

京都府 福島 孝治郎

生業を辛へにしおのが悦びを今日しも母の如何に待たらん

大阪府 林 正俊

春寒しゆふぐれ渡る鐘の音に銀とる歌はみ名を唱へぬ

京都府 馬野 智善

英靈をむかへて寒し宇治川の流れの音もなほなほ寒し

東京 三野 輪紅雪

傘松を尾長き鳥の鳴き去りぬ多摩の山並夕日さすとき

東京 小泉 妙春

眼を病めるもののふもきけ鶯の初音より明く春のひびきを

北海道 押野 尚秀

嵐吹き紅葉ちりしく深山路をあてなく我はひとり行かまし

堺市 笠井 松枝

花かざる戦傷兵の枕べに春日輝くいたはるごとく

福岡縣 三浦 潤子

無縁墓地日露の役の勇士なり今日の佳き日に我はぬかづく

千葉縣 高橋 美矢子

春日さす南の縁に母上はしづかに念珠をつまぐりてゐぬ

長野縣 宮澤 由子

音高く山裾の家の戸明くれば雀子のなくよき朝となる

京都府 野崎 納子

日の丸の下にををしき宣撫班血もて興亜の爲につとめぬ

投稿規定

官製はがきに一四二首以内とし一冊に一編四部歌集係あて送ること



淨土開宗

淨土宗
教學部長

江 藤 澂 英

平安の古都、東山翠巒の一角、華頂峰頭、巍々として聳ゆる知恩

院、これぞわが日本淨土教の元祖、法然上人が一期勸化の道場にして、往生奇瑞の靈跡、淨土一宗の根元聖地である。「鐘かすむ御法尊し華頂山」——靈鐘は殷々として日夜このみ山より轟いてゐる。

承安五年春三月（皇紀一八三五年今を距る七六五年前）修學研鑽廿八年、智惠第一、廣學多才、博覽強記と學德一世に謳歌せられしわが法然上人は、遂に比叡山奥元黒谷なる報恩藏を出で、こゝ洛東眞葛原に下り、麻衣一層の凡僧と化し、高く他力一乘念佛三昧の法旗を翻して、「南無阿彌陀佛」と聲高らかに、淨土一宗の開創を宣言した。見よ、久しく瀛平争亂の巷に徘徊して末法濁亂の苦相に喘げる、當代の民衆は潮の如く上人の膝下に馳せ參じて、佛陀慈光の攝裡に蘇生したのである。げに法然上人の淨土開宗、口稱念佛の宣傳は、七百年前に於ける時代匡救の一大宗教であり、民衆指導の一大信仰であつた。爾來わが淨土念佛の宗教は我が國民信仰の基調

となり、現に全日本佛教信徒の大半はこの念佛信者で占めてゐる。

*

回顧すれば今を距る七百年の往時、我が國の宗教界は正に一場の眞葛原であつた。南都七大寺、北嶺三千坊、徒らにその豪華を誇りしと雖、宗教の本質は學問的施設に囚はれて本末を顛倒して何ら時代の要求を充たす力はなく、一脈清新の氣を流通するに非ざれば、想界、教界は共に空しく窒息するの外なき實情であつた。この時に當つてわが法然上人出で、支那に於てまだ機縁熟せざりし善導大師の淨土教を光闡し、佛陀本願の口稱念佛をして都鄙に遍滿せしめられたのである。その興隆の偉觀、他を壓するの點よりすれば、正に我が日本國は一の淨土教國化したと云ふも敢て過言ではない。即ちわが法然上人の淨土開宗はこれを世界的に云へば、善導大師の繼承者として淨土教の正脈を傳へし第一人者であり、これを國內的に云へば、當代の思想界の紛糾を救済せる大偉人として讃仰す



べきである。

＊

長承二年（皇紀一七九三）を以て生れ、建暦二年（皇紀一八七二）を以て終つた法然上人八十年の一生は、宗教的生活として實に崇高を極めたものであつた。今假りにその一生を大別すれば、承安五年四十三歳にして淨土一宗を開創せられし以前の半生は恰も天台の一學侶としての生活であり、建暦二年八十歳にして樂邦往詣の素懷を遂げられし後半生は、正に淨土宗の元祖としての生活である。前者を以て上求菩提の

生活とするならば、後者は下化衆生の生活であり、前者を以て八宗兼學の達人とするならば、後者は一向專修の行者である。何れの一對を以てするも寔に氣高くして床しき對照を示してゐる。かゝる鮮明なる對照こそは上人の一生に見る一大特色であつて、從て上人一生の外觀は所謂顯的な波瀾には乏しきも、その内面生活は決して尋常ではなかつたのである。今その前半生の苦修練學は姑く措き、後半生殊に立教開宗の跡を追懷することにする。

＊

由來、佛教に於ては一宗開創の通規として多く教相判釋といふことが試みられてゐる。即ち釋尊一代の諸教中に於ける自宗の立場を明らかにするのが例であつて、自他の諸宗を一概に異端邪義として排斥することは尠い。されば基督教分派の歴史などに比すれば頗る平和的である。佛教が分派する場合に衆生の機根に應じて無量の法門が可能であるとされてゐるから、その態度は少くとも形式的には一般に調和的である。我が日本佛教史の跡について見るも、舊宗派は容易にその建立を承認せなかつたとしても、新興宗派は大抵舊宗派を敬重してこれを排斥するが如き態度は取つておらぬ。かの日蓮宗の如き稀有の異例に於ても、天臺一家に對しては頗る調和的態度を持してゐる。ともかく佛教が古來教相判釋の下に發展して來たことは、興味ある史實として比較宗教學者の注意すべき一要點であらう。しかし新佛教の開創はいつでも單にか様な調和的な意義を以て

行はれたかといへば、假令その表面は錦上添花を添ふるといふ美名の下に於てなされても、その實所詮は體よき舊宗教の排斥に過ぎぬ場合が多く、故に新宗派の興立に對しては舊宗派の猛烈なる壓迫を見ずしてはすまなかつた。鎌倉時代の宗教革新たる法然上人の淨土開宗にあつては果して如何であつたか。

*

「我れ淨土宗を立つるころは凡夫の報土に生れむことを示さんがためなり」と、その宣言は寔に卑下謙遜を極めてゐるが、その動機を檢討すれば決して泰平無事なるものではない。即ち深く時代の人心の内面に入つて考察すれば、學問的に表現せらるゝ聖道自力の諸宗は弘通久しにき亘つて弊害自ら百出し、本末全く顛倒して宗教はいつしか學問その者と化してゐたから、その混同から眞に宗教本來の面目を發揮せんとする動機が内蔵されてゐた。動機果してかくの如くなる以上は、いかでか舊佛教の迫害なくして止むべきであらうか。果せるかな、法然上人に依て一度念佛の法門が開闡せられるや、南部北嶺の舊佛教徒は一齊に念佛停止を試みたのである。承安五年、上人洛東吉水の禪房に居して一向專修の綱を垂るゝや、奈良叡山の訴訟は相次ぎ、誓詞起請となり、住運安樂の死刑となり、終には上人の流罪とまでなつたのである。しかしこの時には上人既に三昧を發得し、信仰の圓熟、淨業の勇猛、實に古今その比を見ざる聖者であつた。顛齡七十五歳にして遼遠の海波を渡り、醜所の月を眺むる

老軀を案じて、門弟等は異口同音に專修念佛の興行停止を進言した。ところが上人は嚴として「われたとひ死刑に處せらるゝともこのこと云はずばあるべからず」と、その牢固たる決意を示されたことは餘りにも有名である。淨土教の興隆は實に機運であつたとは云へ尙且つ迫害は免れ得なかつたのである。

溫潤玉の如き人格と寛容そのものゝ如き態度を以てして、斷へず迫害の裡に終始されしわが法然上人の後半生の如きは、我が佛教史上他に類例を見ざる事實であつて、この事實こそは如何に時代人心が思想界の混亂に迷惑し、新宗教の興建を要望してゐたかの消息を語つてゐる。げに上人の淨土開宗は時代要求の結實であつた。

◇

法然上人の淨土開宗、吾人はこれを上人の堂々たる入信の光景に仰いで見やう。上人の前半生報恩藏裡の苦學研鑽は、一切經緯讀五回、善導疏披閱八回といかに時機相應の眞宗教發見に苦心せられたかと思ひやられる。上人四十三歳の入信開宗を以て、寧ろその運きに失するを難する者があるが、上人の如き舊佛教が他の人文要素と混同して本末を顛倒せる過渡期に際して、その混同の荊棘を開拓して眞宗教の面目闡明にはいかに心血を傾注せられしかを知らねばならぬ。兎もあれ上人の一超直入の轉心に至つては、眞にその徹底的痛快味を示されてゐる。げに驟雨一過の後に一輪の清光を仰ぐの趣きがある。

上人が舊宗教の聖道門を擱て淨土の一門を開闢せられし消息は、新修御傳を初め上人の傳記を録する幾多の傳書に散見するが就中かねて上人を請益して親しくその教を受け、絢爛たる文章を以て聞ゆる安居院聖覺法印が、上人の物語りとして傳ふる十六門記はこれを傳へて餘蘊がない。一度この文を見ると身は忽ちにして七百年前の人となり、親しくその場の光景に接する心地がする。曰く、

ある時上人余に語つての給はく、法相、三論、天台、華嚴、眞言、佛心の諸大乘の宗遍學し悉く明るに、入門は異りと雖皆佛性の一理を悟顯することを明す。所詮は一致なり。法は深妙なりと雖、我機すべて及び難し、經典を披覽するに其智最愚なり。行法を修習するに其心驕て味し、朝々に定めて惡趣に沈まんことを恐怖す。夕々に出離の縁の關けたることを悲嘆す。忙々たる恨には渡すに船を失ふが如し。朦々たる憂には闇に道に迷ふが如し。嘆きながら如來の教法を習ひ、悲みながら人師の解釋を學ぶ。黒谷の報恩藏に入つて一切經を披見すること既に五遍に及びぬ。然れども猶いまだ出離の要法を悟り得ず。愁情彌深く、學意増盛なり、爰に善因忽にして熟し、宿緣頓に顯れ、京師善導和尚勸化の八帖の聖書を拜見するに末代造惡の凡夫出離生死の旨を定辨し給へり。粗管見していまだ玄意を曉めずと雖、隨意身に餘り身毛爲に豎ち、とりわき見ること三遍、前後合せて八遍なり。時に觀經散善義の一心專念彌陀名號の文に至て前導の元意を得た

り、歡喜の餘りに聞く人なかりしかども、予が如きの下機の行法は阿彌陀佛の法藏因位の昔かねて定置かるゝをや。と高聲に唱て、感悅體に徹り、落涙千行なりき。

終に承安五年の春、彌四十三の時、立ちどころに餘行をすて、一向專修の念佛門に入て、始めて六萬遍を唱ふ。

x x x x x

實に何と痛快なる徹底であらう。かくて八宗兼學の達人は一變して、彌陀願王のみ前に十惡愚痴の一凡夫としてひれ伏し、日課六萬遍の念佛者とはなられたのである。

上人さきに九歳して敬愛床しき父君に死別、十五歳の少年にして登山、爾來出離生死の求法は一日として念頭を去らず、出でゝは大澤池畔櫻花散る春宵を蟬蟻の清涼寺に參籠し、或は醍醐に名匠を訪ね、南都に知識を求め、入つては黒谷の報恩藏に一代聖教の閱覽に没頭、終に承安五年の入信となるや、その勢の猛烈なる、恰も淫雨連日、大河の一時に決するが如く、その興趣の痛快なる、宛ら千里の征野より懷しの父母に邂逅したるが如き慨があるではないか。革新の機運一度頓然し來るや、絶世の大聖わが上人は傍ら人なきが如く落涙滂沱として歡喜絶叫されてゐる。上下三千載、三國の佛教史を通じて吾人は未だ曾てかくの如き莊嚴なる光景を見出し得ぬ。あゝ承安五年の春三月、淨土開宗の我が教界は永遠に光榮あるかな。

(完)



迫害しえざるもの

友 松 圓 諦

法然上人が諸宗からの迫害をうけられたことを書くやうにたのまれた時、すぐ私のこゝろに浮かんできたことは、はたして法然上人に「迫害」などいふやうな氣持があつたらうかといふことである。それはたしかに、はたから見れば迫害であつた。七十四歳の高齢にもなつて四國に配流の刑をうけるといふことが何で迫害でなからう。四國と今でこそ、易く考へるけれども、そのころの四國である。船路もこゝろ許ない四國のことである。配流ばかりではない。それまでの十何年、うちつゞく諸宗からの無理難題である。弟子や信者の目には千々に心をくだいた迫害であつたにちがひない。しかし、法然上人にとつては、多少胸に落ちぬところもあつたかも知れないが、かりした四國の迫害を迫害としてはおうけにならず、これを佛道をあゆむ必定の一路と受けとつてゆかれたにちがひない。すべてからなることをわが身のいたらなさ、自身の深い罪に歸してうけられたにちがひない。身近かの弟子達の心ない輕擧によつてみち

びき出された事件にしろ、このことのゆゑに、弟子の上に罪をかへすことなく、みんな、師たる自分の責任と受けとられた。ひとをとがめず、はたに責任を轉荷せず、ひらにわが業繼の上に、すべてのくるしみをかへらしめてゐるところに法然上人の偉大があり、宗祖をめぐる者の同位結束が生れる。むちうたれて靜かにこれを叉手頂戴してゐる上人の崇高な態度にこそ、ひとはこゝろをつかれた。弟子や信者は生命をまことに上人への歸依をあつくした。この聖のたまめなら死んでもいいと決心したのである。迫害といふものは新興宗教には伴ひ易いものである。然し、迫害がいいのではない。この迫害をどう受けとるか、生活態度によつてその宗教は第一歩の試練をうける。迫害にたえてゆくところにその宗教は初めて生存權を獲得する。迫害にたええといふことは、その迫害を迫害ともうらまずに、はたを批難せず、ひとをうらまず、自らの上にこれを責め、かゝる因縁を如來の善巧方便と受けとるだけの信仰のつよさを意味する。

思ふことが、逆にゆくと、その相手方を、なんぐせつけたいものだ。ましてや、目に見えてわれに仇する者を入つぎきにもしてやりたい氣持の起るものだ。もう少しあの人を手をかしてくれさうなものだ、何とか助け舟を出してくれたらと、身勝手なことを考へるのが人間である。

「十惡五逆」の人間性をふかく自らの内にかみしめてゐられた法然上人には必ずかうした煩惱を自らに見出されたこともあつたらう。しかも、しづかに、大地の如き懺悔のこゝろをもつてこれをうけとる。ほとほとにわが心のみにくさにはちる。ことのすべてをあげて、非を他人に轉荷しようとするあさましい自分のすがたの前に手をついたとき、その手はいつの間にか合掌となつてゐる。そこには如來の恩寵かなみなみとあふれてゐる。「邊土の化益あまねからず」から四國の配流をいたゞいたのである。配流もいまは配流ではない。如來からの傳道の使節なのである。瓦礫はいつの間にか金と變成してゐるのである。迫害は恩寵とかはつてゐる。このうけとり方、この信仰にこそ法然上人の教



全

國はかたくむすばれたのである。

御法語 淨土の再會

承元元年御年七十五歳にして法然上人が遠流の宣旨を蒙つた時申された次の御言葉こそ上人の確固たる御信念を物語るものである。

「流罪更に恨みとすべからず。其の故は齡既に八旬にせまりぬ。假令師弟同じ都に住すとも娑婆の離別近きにあるべし。たとひ海山を距つとも淨土の再會何ぞ疑はん、又厭ふと雖ども存するは人の身なり。惜しむと雖も死するは人の命なり。何ぞ必ずしも處に依らんや。然のみならず念佛の興行洛陽に年久し。邊鄙に赴きて田夫野人を勸めんこと年來の本意なり。然れども時至らずして素志未だ果さず。今事の縁に依りて年來の本意を遂げんこと頗る朝恩とも云ふべし。此法の弘通は人は止めんとすとも、法は更に止まる可からず諸佛濟度の誓深く、冥衆護持の約懇ろなり。然れば何ぞ世間の機嫌をはかりて、經釋の素志をかくすべきや」



紫雲たなびく日

佐藤賢順

— 紫雲たなびく日 —

東山大谷の禪房のあたりと思はれる空に、この頃時折、紫雲のたなびくのが見受けられる。遙か離れて西山に住む炭焼達がこれを見つけて、何か變つた事があるに相違ない、などと噂し合つた。一人や二人が見たといふのではなく、大勢の人達が眺めたのである。中には態々東山まで出かけて知らせてくれた炭焼さへある。

廣隆寺から下向する禪尼も、途中でこの奇瑞を見たと言つて大谷へ尋ねてきた。

建曆二年正月二十三、四日の頃の事であつた。

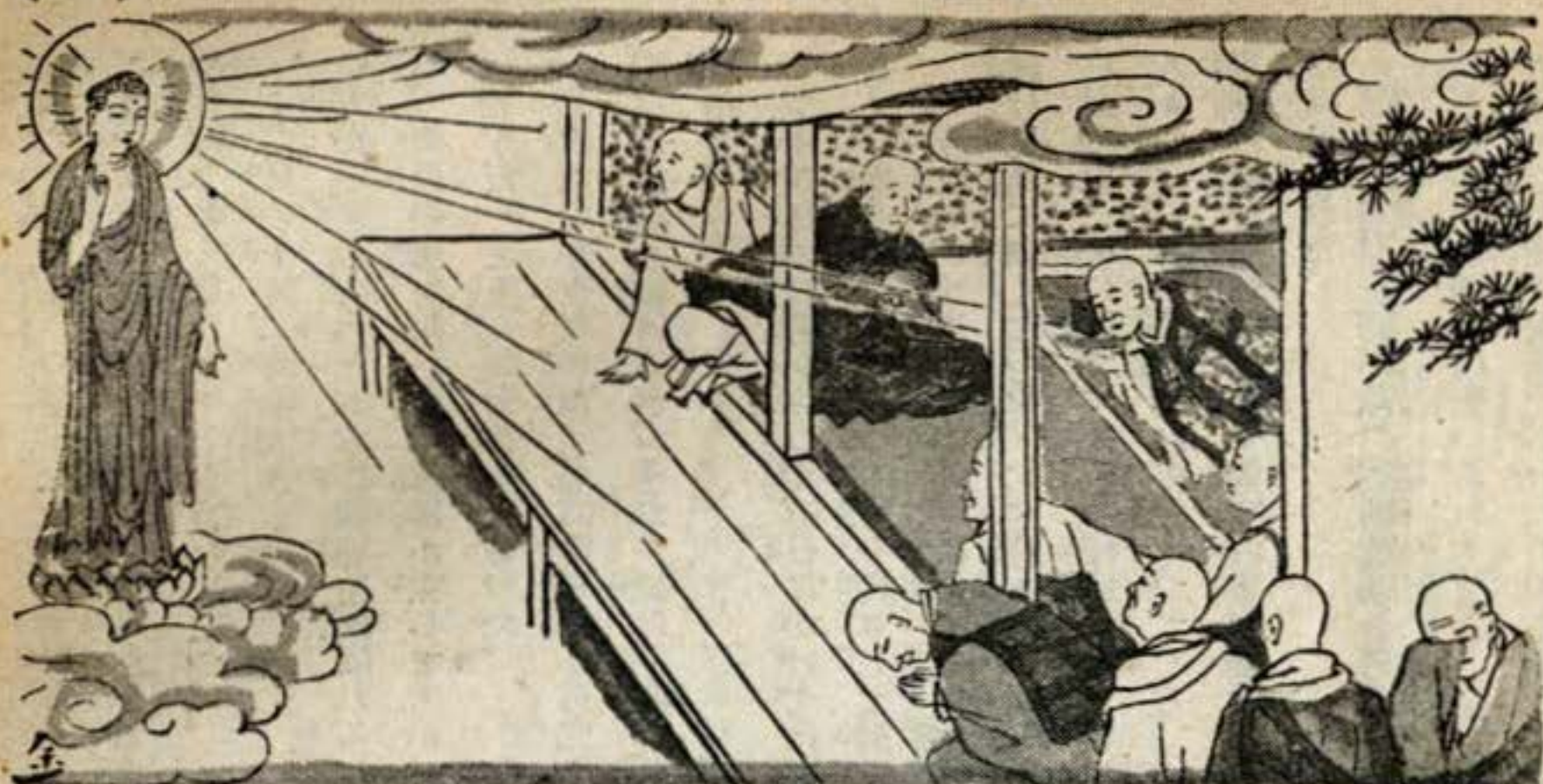
大谷の禪房のあたりに、紫雲がたなびき始めたのは、この月の二十日頃からで、時にはその雲の中に、また色鮮かな圓形の雲があつて、それが恰も畫像に描かれた佛のお姿のやうに拜されることさへあつた。

「流人藤井元彦」といふ名で讃岐に配流の身であつた法然上人が、

遠流赦免の御沙汰を頂いたのは、この年から數へて五年前の師走も間近の頃であつたが、まだ都へ歸るお許しはなくて、關津の勝尾寺に御滞留なさつてゐた。それが漸く前の年の十一月十七日に都へ歸つてもよいとの宣旨が下つて、四年間縁を結んだこの地の道俗に別れを告げて、十一月二十日、住みなれた京都へお歸りなさると、慈鎮和尚の御配慮で懐しい大谷の禪房に暫くの居を定め給ふたのである。

建曆二年には御年既に八十である。正法宣布の爲に身に受ける讒訴、迫害、法難の數々、まして御高齡になつてからの邊土への御旅路は、「この法の弘通は人とはとゞめんとすとも、法さらにとゞまるべからず」といふ固い信念の淨火に燃えてゐる御身にとつても、決して軽い御苦勞ではなかつた。

建曆二年正月の二日、長らくの御心勞の故であらう、お身體は益々衰弱なさつて、食慾もずつと減退せられた。この二三年は耳も目



もすつかり弱つてしまはれたのに、不思議な事に、この頃になつて、昔日の如き聴力や視力をとり戻された。お話としては往生の事の外は一切話し給はず、聲高く念佛を續けられて、夜中と雖もお口のあたりが靜かに動いてゐた。

三日の夜八時頃、弟子の一人が、「この度の極樂往生、疑ありますまい」とお尋ねすると、「我もと極樂に在りし身なれば然るべし」とお返事があつた。超えて十一日の朝、上人は床の上に起きられて、聲高く念佛を續

け給ふた。これを聞いて涙を流してゐる弟子達を勵まされて、「早く高麗に念佛すべし、阿彌陀佛來り給へり、この佛のみ名を唱ふる者は、往生せざるといふことなし」と仰せられた。念佛の功德を讃え給ふこと昔日と少しのお變りもない。そして更に言葉を續け給ふて、「觀音菩薩、勢至菩薩、聖衆現れ給うて我が前に在し給ふが、拜するや」とお尋ねになつた。弟子達には一向にそれが見えないので、「拜することができません」と正直にお答へすると、「念佛すべし、念佛すべし」とお勧めなさるのである。

その時、弟子は御病室に安置してある本尊に拜みなさるやう上人にお勧めすると、

上人は虚空を指して、「その佛の外にこゝにも佛は在す。拜するや」と仰せられて、「十餘年このかた、極樂の莊嚴、化佛、菩薩を拜することは常であつた」と語られた。

又、弟子達は、御病床近くに御安置してある御佛の手に五色の糸の一端を結び、他の一端を上人の手にお執らせしやうとしてお勧めした。五色の糸は五色の雲である。念佛行者の臨終には、五彩の雲に乗つて、佛、菩薩は來迎し給ふのであるから、五色の糸で、如來と行者とはしつかりと結ばれる。けれども上人はこの弟子達の勧めをも拒けて、「そのやうなことは、常の人の儀式なり」とおつしやつて遂に糸をお執りにならなかつた。

禪房の上に紫雲のたなびいたのは二十日の事であつた。お弟子

が、「この空に紫の雲がたなびいて居ります。御往生が近いのでございませう」と申上げると、「あはれなる事かな。一切衆生に念佛を信ぜしめん爲なり」とお喜びになつた。

この日の午後二時頃大きく目を開いて、じつと虚空を見すえ、西の方から東の方へと五六度視線を運ばれるので、病床に侍る者達は、奇異の感を抱いて、「佛様が在しますか」とお尋ねした。

「さうだ」と上人はお答へなさつた。

紫雲たなびき異香薫する二十三日から二十四日にかけては、殊に聲高に念佛を續けられ、それが或は一時に及び、或は二時の長きに及んだ。

二十四日の日暮から二十五日にかけては、高聲念佛絶えることなく、弟子達が五六人づゝ代り代りして御助聲申し上げてゐた。

とうとう二十五日である。晝近くまで念佛は續けられてゐたが、聲は次第に細くなつた。たゞ時々思ひ出したやうに高聲が交るだけになつた。庭に集つて室内の模様を氣づかはし氣にうかつてゐる人々の耳にも、時折それが傳はつてくる。いよいよ御臨終である。由緒の深い慈覺大師の七條の袈裟が懸けられた。頭は北に、面は西に向けられた。

光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨

といふ句を微かに唱へられて、それが終るか終らぬうちに、遂に眠るが如く大往生を遂げられたのである。二十五日の正午であつた。

私はこの偉大な聖者の臨終を傳へるのに、如何なる形式によるべきかに迷つた。結局、私見を挟み、憶測を交へることなく、信實すべき史料によつて、その時の情景をそのまま傳へるが最もよいと信じ、「見聞出勢觀房、法然上人傳記、一期物語」の中の「御臨終日記」によることにした。この一期物語は、上人の滅後凡そ三十年の頃、勢觀房の見聞を主とし、兼ねて諸弟子の間に傳へられた傳説を纂集したもので、勅修御傳の御臨終の記事も、これを潤色したものと察せられる。私達はこれらの史料によつて、その時の嚴肅な情景を靜に察し靜に觀じ靜に味ふやう他に遺はない。

なほ一期物語の筆者は終りに次のやうな傳説を附け加へてゐる。

或人が七八年前に次のやうな夢を見たことがあつた。或る人に大變大きな雙紙を見せられて、何が書いてあるのかと思つてこれを見ると、それは色々の人の往生の事を記した本であつた。法然上人の御往生の事を書いた所があるかなと思つて、見てゆくと奥の方に記してある所があつた。光明遍照……四句の文があつて、上人はこの文を誦して往生せらるべしと記してあつた。然しこの人は、この夢の話を、上人にも、弟子達にも語らなかつたが、事實と夢とがびつたりと符合したので、いよいよ不思議の思をしたといふ。

その他にかういふ夢想は枚舉に遑がないから略して記さずとも書いてゐる。

信仰相談 中村辨康

早くお慈悲の光に會ひたい

(問)

お説教に詣つた後でお坊さんに直接あつて信心を戴かして貰ふたと云ふ人が段々あります。中には徹夜して信心を得たと云ふ人、または二三回目に開けたと云ふ

(答)

貴君様ばかりでなく誰でも信仰を求めのに最も早く最も容易にと望ま

て、私にすゝめて呉れる人があります。私はかゝる事を聞く度に獨り考へて見ますが、決して疑ひは持ちません。私も多少は御佛の教を信じて少しは書物も讀まして貰つて味はされて居りますが、私には眞劍味が足らないのでまだ迷の暗にぶらぶらして居ります。尋ねたいと思ふても何んな事を聞いてよいやら、悟りを開く智慧もなく、眞の悟りハツキリした喜びに到達する力もないから、眞實の御慈悲の御光に會して貰ふ近道を極平易に御教示玉はりたいと思ひます。また之等の書物を御示教下されても結構に存じます。眞宗聖典と云ふ本は何んなものでせう。代價發行所をお

尋ねいたします。(熊本縣・江田・五一生) ない人はないでせうが、信仰は容易のやうであつて中々なまじいことではないと思ひます。無論宿善の然らしむるところ、一回の御話を聞いただけで、或は一冊の信仰書を讀んだだけで、信仰に入れる人もありませうけれども、誰でもさうあるべきだと云ふ譯には行きません。

佛教で智慧を獲る方法として「聞思修の三慧」と云ふことを申しますが、聞慧と云ふお話を聞き或は書物を讀んで得る智慧よりも、思索若しくは觀察に依つて得る智慧の方がよく、更には實踐に依て體驗して獲得する修慧の方が一層確であると教へて居ります。と云ふのは聞いて得た智慧はそれ以上のものを聞

けば變化し易いからですし、觀察等に依て得た智慧も實生活と離れて居るだけにそれ以上の深いものを得た場合には是れ亦たぐらつきます。だから六波羅密の如き生活にピッタリ應同した修慧を以て最もよいものとして居る譯です。

然し之は聖道門流の話で、淨土門的のものではありませんが、唯だ眞宗では信仰と云ふことを「佛智を頂く」と見て「聞思修の三信」を説いて居ります。勿論眞宗以外の淨土門各宗に於ても「聞く」ことを軽く取扱つて居る譯ではありません。それは説教とか講話とか云ふことを布教上の大眼目として居るのを見ても分る譯ですが、單に聞きさへすればよいとして居るものでは決してありませんまいと思ひます。

何事でも事を始めるのに先以て「聞く」「學ぶ」ことが大切です。聞かず學ばずして知る道理はないからです。然し聞くことは實踐の前提であつて聞きつ放しでよいと云ふ筈はありません。殊に信仰は如來様のお慈悲を喜んで如來を欣慕し如來の御名を戀うて行く心境と實踐とでありますから、聞く事は絶対必要

ではありませんが、それも生活の上に實踐されなければ自分では「信仰だ」と思つて居ても事實は一種の執念に過ぎなく、やがて「概念」になつてしまします。

また信仰の形に「仰信」と「解信」と「證信」との三つがあり、其中の「解信」は「聞信」即ち聞いて信ずることと同じやうなものです。それが「體解」とか「勝解」とか「領解」とか云ふやうに、單なる理解だけではなくして、やはり一種の體驗とか體感とか云つたやうなものを伴つて居ります。

かやうに唯だ聞いたり讀んだりしたのみで信仰に入らうとすることは、餘程宿善がある人ならば何うか知りませんが、通常ではさう簡單には行かないと存じます。

また眞劍味の足る足らぬと云ふことも、畢竟は宿善開發の時節到來が近づきつゝあるか否かです。と云つても棚から牡丹餅の落ちて来るのを口を開けて待つて居ることの非常識であるのと同様に、吞氣に入信の時節到來を當てにして待つて居るのもいけません。自身を反省して眞劍味が足らぬと思つたら、眞劍味の増すやう一心に如來様におすがりしたら

よいではありませんか。

貴君は眞劍味が足らず暗の中をぶら／＼して居るとなげいて居られますが、皆なさうなんです。皆んな吞氣さうにぶら／＼して居るのです。それは獨り未信者のみでなく却て信仰に入つて居る人の方がさうした深い反省を持つものなんです。それは信仰の増上を要求して居るからです。要求して居ながら然かも浮世のことに引き連られて、そちらの方に努力を費やせられてしまつて居るのを残念に思ふからです。

また貴君は御慈悲のみ光に遇ふことを御望みになつてますが、如來様のみ光は常恒不斷に十方の世界を照して居られるのですから、眼を上げて見さへすれば何時でも見得られる筈のものです。然るにそれが見へないのは煩惱の雲深くして眼が覆はれて居るからです。

法然上人も「柴の戸にあけくれかゝる白雲をいつ紫の色に見なさん」となげかれたこともおありでした。人間生活の上に起る一切の事は皆な悉く如來様の御慈悲でありみ光であると感じられるやうになりたい、さうなつた時、煩惱の雲變じて紫の雲となるのであ

りみ光に遇ふのであります。然しそれは私達の方でなす力の爲ではなく、如來様の方で適當の時に私達の眼を開けて下さることに依つて出来ることなのですから、私達としては唯だ一心に如來様を欣慕し如來様の御名を呼んで、眼を覆ふて居る雲の薄らぐやう願ひするより外に方法はございません。然し例へば如來様の御光を見得なくとも「彌陀頼む人は雨夜の月なれや影見へねども西へこそ行け」と云ふ古い歌の通り、如來を頼む心と行爲即ち信仰心と念佛とがある限り「念佛衆生攝取不捨」の現益を受けつゝある譯です。但し此「彌陀頼む」心が痛切になり純粹になれば、よしそれが瞬間であつても「面見阿彌陀佛」と云ふことにならぬとも限りません。それに「別時念佛」と云ふ事がよろしいと存じます。別時念佛は通常一週間位の日を區切つて朝から夜まで念佛に終始するのです。すると段々如來様の御慈悲に促がされて如來様への心が痛切になつて行きますからさう云ふ體驗も得られる譯です。委しいことは忍叡上人の「念佛三昧法誡註」と云ふ本に依られたらよいでせう。然し一人ではあきが來て中々續

くものでないからせめて二三人の同行が必要
です。

次に御尋ねの信仰書ですが、今の面白い本
はないやうです。私の書いたものとしては、
不完全乍ら第一書房発行の「法然上人聖語讀
本」(定價一圓五拾錢) 鐵仰會發行の「信仰
讀本」などがあります。次に「眞宗聖典」と
云ふ名のものには二三種あるやうですが、聖
典と名の付いたものは何宗を問はず、其宗正

五逆罪は救ひに洩るゝか

(問)

小消息に「西方を願ふは十惡五逆の
衆生の生まるる故なり」とあります

けれど、第十八願には「設我得佛云唯除五逆
誹謗正法」とあり、五逆罪は不攝取の如く伺
はれますが、自分は只今日課千邊以上の信行
怠らず勤めて居りますけれども過去に佛堂に
關し五逆罪に準ずる罪科有之、元祖の小消息
に五逆をも生ると明されます御意を願文に即
して御教示下さいませ。(鳥根縣・西川生)

(答)

御尤もの御尋ねですが、之は昔しか
ら云はれて居ることと如來様の大慈

依の經典と祖師方の書かれた書物、法語など
集めたもので畢竟讀誦用か研究用か参考用か
のものです。かなり頁數の多いのもあり、信
徒用としての薄いものもありますが、何れも小
型ですから讀みにくい感じが致します。私も
眞宗聖典を二三持つて居りますが、手許にあ
りませんから代價發行所共に分らずまた記憶
して居りません。御許し下さい。

悲から見れば如何なる惡人と雖も救ひに洩
れることはありませんから、五逆罪を犯した
者でも或は正法を誹謗した者でも、一たび我
身の惡き事が反省されて如來の大慈悲にすが
るより外に手段もなく解脱することもないと
知つて、一心に念佛すれば必ず往生を得る次
第ですが、それでは何んな惡い事をしてるか
まはぬ、如何なる惡人でも救つて下さるのだ
から、寧ろ惡人こそ如來救済の目標であつて
惡を恐れるのは却つて如來の正意を無視する
ものだ、逆に「惡」を肯定しやうとする私

達凡夫の劣情を排遣する必要上、本願の文に
は「但書」を置かれて「唯除五逆云云」と云
はれた譯です。五逆罪と云ふものは罪の最も
重いものであり、また正法を誹謗することは
「無信仰」を意味するものでありますから其
に「救ひ」の網の中に入ることは出来ません
けれども、一たび悔ひ改めて惡かつたと懺悔
し、正法たる「如來の本願」を信するならば、
過去には犯五逆罪者であり誹謗正法者であつ
ても、懺悔入信に依て、今は信正法者であり
懺悔滅罪者であるのですから、その「唯除」
の仲間から離脱し救はれる者に更生して居る
譯です。あなたが過去に何か佛堂の事で罪を
犯したとしても、それが今ま悔ひ改められて
日課稱名にいそしんで居られるならば、其逆
縁が正縁に導かれた動機となつたのですか
ら、あなたに取つてそれが悲しい思ひ出の一
つではあるけれども、其憶出の度毎に「念々
稱名常懺悔」で常に正しき方へ正しき方へ
と導いて呉れるよりよき指導者ともなつて呉
れて居る譯ですから、幸ひに懺悔し得て念佛
にいそしみつゝある現在を御喜びになり、法
然上人が信ぜられた如く(五二頁へ續く)



3

馬造は仙八の家に引きとられた。生まれた時から芝の家を離れるのは子供心にも妙に悲しい思ひだつたが下谷竹町の仙八の家に移つてみると、今までの親一人子ひとりの住居とちがつて、多勢家内の賑やかさがめづらしく、馬造はすぐ新しい境遇になづいて行つた。若いころから甲斐性と云はれてゐる仙八は、三吉が末で三人の弟子を抱へる立派な棟梁だつた。子供は十五と中が三人缺けて四つになる娘ふたり。だから馬造の出現は、天から授かつた男の子だと仙八もお妙もよろこん

馬造の出世(續)

佐賀 一海
中島 松二畫

でゐた。

學校も新しくなつた。はじめ二三日は教室の隅つこで小さくなつてゐたが、友達はおきに竹の子のやうに殖えて來た。家に歸るとやつと歩きまはるやうになつたお節坊と大の仲好しだ。或日、馬造はお節坊の手を引いて廣小路のへんまで遊びに出かけたが、戻りにお節坊を背負つて來ると、家の近所で仕事歸りの仙八に出會つた。すると仙八はいつになく荒つぽい仕草で馬造の背中から娘を抱き取るなり、

「男の子守りは見つともないぜ。うちちや三

吉にもさせたことがないんだ。これから氣をつけな。」

と叱り口調だつた。馬造はぼかんと棟立ちになつたまま、どういふ譯でさう云はれたのかわからなかつた。だがその晩、長火鉢の前で一杯饒饒の仙八が、

「どうだ馬坊、馬坊はお父さんや小父さんみたいになんたいと思ふか。」

から話しかけた。ちやぶ臺に兩肘突いて雑誌をよんでゐる姉妹の菊の傍で、同じ雑誌の挿繪を覗きこんでゐた馬造は、

「うん。」とこつくりをした。

「然し、もう大工なんて商賈は駄目だぜ。何か、もつと偉い仕事を見つけるんだな。」

「うん。」

「何か成りたいものがあるんだらう？」

「うん。」

「何でもうんか。せうがないが、まあいゝや。」

仙八は笑つた。

4

梅が咲いて、春の日差しがいち日づつ濃くなつて行く。教室では、新入の馬造の綴方を先生が讀んでゐる。父親の死んだことや新しい家のことを書いたのだ。先生は讀むまへに、

「こんどの綴方は、中山馬造君のがいちばんです。」と云つた。さうして二回繰返して讀んだ。讀み終ると感心、感心を何度も云つた。

「中山君は新しく入られたので、先生にもまだよくどういふ子だか分らんが、この綴方をよむと大へんすなほで思ひやりが深い氣がする。みんなも馬造君と仲よくし、馬造君のいゝところを眞似するやうにしないさい。馬造君の……」

こゝまで先生の語がつづいたとき、四五人の生徒がくすくす笑ひだした。するとその笑ひ聲は忽ち教室中に傳はつて行つた。先生はハツとしたらしいが、生徒達を制するまへに、先生自身も笑つてしまつた。——馬造は承知してゐる。しかし彼自身どうしたらいいのか、身のもつて行きやうがない。

「うま、ぞう、……うま、うま。」

二の側の後ろの方のでつかちの一人がふざけた聲を發した。みんながまたどつと笑つた。……仕方がないので、馬造は黒板を睨んだきりだ。泣きたいやうな氣にはならない。

「小父さん。うちに歸つてから、馬造は仙八にやつとのことで質問をしたのだつた。『馬造つて名、可笑しいかい？』」

「どうしてだ？」

「友だちがみんな笑ふんだ。先生だつて笑ふんだもん。」

「馬鹿にするなッて云へよ。親に貰つた名がをかしなもんか、馬吉の馬の字ぢやないか。

大切にしないけりやいけないよ。」

仙八にかり云はれて、馬造は納得した。誰に笑はれても、もう大丈夫だと思つた。

三月、お免狀式の前の日だ。二年生であることももうけふきり。午前中に通信簿が生徒達に渡され、午後は父兄會開催。馬造のところからは氣取りやの菊が代理で學校に行つた。馬造は先生から立派に及第だと云はれたので安心は安心だつたが、渡された通信簿に課目の採點がないので、途中で學校を代へたことが残念でたまらなかつた。

菊はにこにこしながら元氣で戻つて來た。

そして馬造を見ると、

「先生が褒めてゐたわ、感心ね。」

老せた口調で云つて、頭を撫でた。

「馬ちゃん組でいちばん出来る子だつて先生が云つたわ。だけど三學期だけだから、こんどは順番に入れられないのだつて。ほんとに總代よ。」

晩、菊は父母のまへで、この新しい弟の馬造のことを得意がつた。仙八が褒美をやら

なければならぬと云ふと、お妙も傍から口を出して、何でも欲しいものを云ひな、と馬造に云つた。然し馬造は「うん。」と肯いたきり、何も云ひださなかつた。

5

馬造の周囲には平和な日が過ぎて行つた。

ちやうど馬造が小學校六年の夏休みだ。日本橋の或紙問屋の隠宅が上野山下の繁華な料理店街の一隅に、あたりの空氣とはかけ離れた静閑な地面を拾ひものにしたやうな面持ちで建てられることになつた。その隠居は仙八ひとりを見込んで、日數に限りは置かないが心ゆくまでの仕事をして欲しいとのことだつた。仙八は毎朝早くから三人の弟子を従へて仕事に通つた。さうして午近くなると捲へ立ての重い四ツの辨當箱を兩手にぶらさげてうちから運ぶ——それが馬造の日課だ。普請場の空地から不忍池が見渡せる。蓮の葉ツばに燦々と眞夏の陽が降りそゞいである。材木置場の蔭にからだを投げだして、辨當を運んで來た馬造はうちへ戻らうとはせずに讀書にふ

ける。本を讀むことが無上にうれしいのだ。

「うちの學者さん」仙八一家の者はみんな馬造をさう呼ぶ。無口は無口だつたが、別段ひねくれた性質ではなかつたので、その稱號は馬造に對する皮肉や厭味を表明するものではなかつた。——二日おきに普請場にあらはれる隠居が或日、馬造に對つてはじめて口を切つた。

「いつ來ても本ばかり讀んでる子だ。どうだ、まだお父つあんの手傳ひしなくてもいいなら孫達の行つてる海へ行かないか。」

馬造は無表情の顔をあげた。然し海といふ言葉が彼の心を強く誘つた。

「行きたいな。」と彼は云つてしまつた。

「よし、それならお父つあんに話してやる。」隠居は馬造を仙八の一粒種の男の子だと思つてゐるらしい。

その隠居のいふ海——千葉縣の白濱に馬造はお節坊とふたり、隠居に連れられて十日ほど行つた。孫といふのは馬造より年上の中學生や女學生達だつた。それがみんな馬造より

子供らしい遊びに耽つてゐる。空氣のちがひで著いた翌る日いち日は小さくなつてゐたが、次の日からは馬造も大威張になつた。廣い海がめづらしく、すばらしい。泳ぎは二日で覺えた。何もかもが愉快かつた。たゞ砂のうへで角力が始まるとき、小粒の馬造がなかなか中學生に敗けないので「強い強い、馬公手取りだ。」とほめられる。すると何のことなしに父親の顔が眼のまへに泛ぶ……力が抜けて厭になつてしまふ。晩は隠居の將棋の相手をさせられる。終幕將棋の見やう見真似で、馬造はいつの間にか覺え込んだ。隠居は夢中だつた。

二日ばかり、お節坊が水あたりで熱を出した。馬造は殆ど附きりの世話を焼いた。隠居が東京へ知らせようといふと、馬造は頑強に頭を振つて「大丈夫」を繰返した。夜中に隠居が眼を覺ますと、次の間の蚊帳の中でぶつぶつ聲がしてゐる。耳を澄ますと馬造がお節坊に一所懸命童話を讀んで聽かせてゐるのだつた。……

まつ黒になつて馬造は東京に歸つて來た。

6

その年の暮、隠宅の普請が片づいて、新年早々住ひ手が移つて來たが、——あのやもめの隠居と小女の二人のほかに、新しく馬造が加はつたのだ。小人數で淋しいから、うちから學校に通へばいい、學問が好きなら中學へでも何でもいれてやるから。條件も約束も改つてない、たと隠居が馬造が好きでならないうつだけだつた。馬造は新しい境遇にすぐ馴れて行つた。

大正十二年の震災で家は焼けたが、今度は前より廣い家が建つことになつた。隠居はまだ元氣だつた。ところが中學を出て、地方の高等學校に行つてゐた間に、馬造は隠居の死に會つた。



八十六の大往生だつた。そして、東京帝大の法科に入學してからは、隠居の遺言で馬造が隠宅の主人に納まり、學費や生活費を日本橋の本店から支給されることになつた。

「人間、運のいいツてのは理窟のほかだが、それだけの徳をもつて生まれて來た人にやかなはない。」

仕事歸りの仙八はときどき立寄つては馬造に云ふ。馬造はたゞ周囲が興へてくれた生活に順應して來ただけだと考へてゐる。それも自分が大工の件として地位も金力も何もないところで育てあげられたせゐで、ていつけ世間といふものを考へなかつた——そんなところから受身の生活が却つて自分を自由にしてくれたのだ、とも思ふ。

「結局、僕のぼんくらの徳ですよ。」
馬造は仙八に答へて、何ものに向つても感謝しなくなつた。

馬造は二十五の年、帝大を卒業すると外務省入りをした。さうして翌年の五月末、公使館書記として南米に赴任することになった。そのまへに、彼は生まれてはじめて自分の意志から仙八の末娘のお節坊をもつたいと云ひだした。仙八は馬造の將來のさまたげになるだらうと、始めは肯じなかつたが、馬造の考は強固だつた。華やかではないが、楽しい賑やかな結婚式が挙げられた。

出立の一週間まへ、馬造夫婦は揃つて國技館の夏場所を見物した。彼は子供の時以來角力は殆ど見ずに過したが、いま新しい門出に角力を見ることが、何となく死んだ父親への供養に思はれたからだつた。だが一階席の人中から土俵を見下ろす感じは、自分の追憶にある角力とはまるでかけ離れたものだつた。彼は昔の面影をあれこれとさがしながら館内の隅々に眼を移してゐた。ふと氣がつくと彼の傍らの節子は喰ひ入るやうな囁を土俵に吸ひつけてゐて微動だにしない。彼はほつとしたやうに、

「さうだ、お父つあんがゐなくても、自分は孤兒にならずにすんだ。」

かう心の中まで呟くのだつた。(了)

新刊紹介

皇室と寺院

佐野惠作氏著

宮内省總務課に多年奉仕せを著者が 皇室と寺院の關係についての眞摯な研究の結實である。本書については卷頭を飾る宮内次官男爵白根松介閣下の序文がよく全貌を語つてゐる。

皇室と佛教即ち 皇室と寺院は極めて密接な關係がある。古來皇室に於かせられて佛教を信仰或は保護遊はされたのは、崇嚴敬虔なら御信念に出づるものとはいへに國家の長久、人民の幸福安寧を祈念され、國民を善導する、深い思占に依るもので、佛教が今日の如く興隆發展を遂げたのは全くわか皇室の偉大なる御力に外ならないのである。歴代の天皇、皇后、皇子、皇女の御方が佛教を信仰し、修行し給へることは歴史に明かな事實であるが、現在も皇室から種々の恩恵を蒙つてゐる寺院も少くないのである。……(下略)

著者の如き宮内省にあつて多年現在實際にその職に當つてゐる人が、皇室に關係ある寺院の由緒を審かにし、恩恵の一々について解説されてゐる點は本書としては眞に著者その人を得たといふべきである。内容は御修法、師號宣下、(大師號、國師號、禪師號)勅額、勅封、陵墓關係寺院、門跡寺院、御由緒寺院、皇室御緣故寺院、皇室御關係寺院等九章數十節に亘つて詳説され鮮麗な多數の圖版が添えてある。菊版高雅裝幀卷頭には松平宮内大臣の鎮護國家なる題簽と聖上觀音立像を御覽遊はさるゝ玻璃版がある。皇室と寺院の關係を知る好著である(明治書院發行定價金四圓五十錢)江藤

俳壇

大田耳動子



鎌倉町 吉田 智平

九體の御佛寂びて枯木立

評—引き入れられるやうな静寂さと思は
せ、自づから心の置むを憂ゆる。原句
は冬木立になつてゐるが、冬木立と枯
木立との意味が違ひ、枯木立でない
何となく御佛九體の見透しがきかない
やうな氣がしてならない。

岡部市 吉田 眞砂二

立春の征地より等は恙もなく

評—立春の征地より、強き父よ。御健在で
をられませうか。貴方の子供達は、み
な恙もなく良く遊び良く學んでをりま
す。どうぞ家のことは御心配なく、と
云ふやうな意を是だけに纏めえたもの
と思はれる。「恙もなく」と六字になつ
てゐるのが反つて句に重みをつけてゐ
ると思ふ。

千葉縣 安田 保治

菜の花の花粉まみれにかくれんぼ

評—此の句を一讀すると、ほゝえましき
が、こみ上げてくる。うらゝかな光景
である。「花粉まみれ」が良い。

浅草區 鈴木 白舟

月の夜の凍てゆく音と更けてゆく

本郷區 藤澤 全翁

夜鶉や冬空高く星の河

堺市 節井 松枝

奥津城の母のかたへの梅の花

奈良縣 久野 佐太郎

思ふこと思ひつくせり日向ぼこ

鹿児島市 太田 清子

線香の良き香けふりて梅の花

奈良縣 福井 定正

遠まわりして路樂し春日和

東京 雅 恵

短冊の添へてありけり草の餅

福島縣 齋藤 華舟

春泥や嫁ぐ日の髪となりて来る

京都 黒野 智善

宇治川をてらす月かげ我見入る

名古屋 宮本 白洋

街屋根の起伏に影ず冬日かな

名古屋 友淵 蓮晃

此の月をいづくへか行く戀の猫

大津 別府 規子

うららかに水仙咲きて湍山寺

佐世保 山口 義治

夜藥の灯霜に線路もほの白し

岩手 西野 仰峰

拍子木につめたき街の静けさよ

大阪 木全 澄子

月いでていよゝ明るき野道かな

廣島 小槻 邦香

我が家の梅手折りゆく御忌詣

米子 宮本 白土

豆炭の甘さ眼にし明日試験

滋賀 重野 ふみ子

御忌會のすみて静かに雪の寺

北海道 六迷庵 霞山

突撃の雄叫び冬の闇深し

小樽 中村 もん

春の夜やはらから集ふ母の居間

大阪 林 正俊

母と二人ゐて食ふべけり櫻餅

東京 鎌田 敏子

母の日の父へ小菊の押葉かな

東京 三野 輪紅雪

鶏に卵だかせて雲ふる

和歌山 奥村 映水

梅が香を籠の内に通りけり

長野 宮崎 榮子

黄梅よ兒の誕生に咲かせ見よ

兵庫 三木 猪川

はろばろとつゞく野燐を土手の上

東京 藤村 芳男

朝やけにすみ繪ゑかきて松林

埼玉 小瀬 清秋

春の雪はらへば袖に溶けいりぬ

長崎 池田 眞三

連の池水すみて柳鱈

石川 西村 けん治郎

湯氣寒し藥湯の香のたゞよひて

京都府 福島 孝治郎

黒煙り残月蔵ふも冬の朝

大分縣 石堂 柑山生

畠打つて軽く汗ばむ春日かな

長野縣 宮澤 圭子

花の頃年賀のことも叔母の文

千葉縣 森田 法晃

鳶舞ふや干場の海苔の香もたかく

朝鮮 松岡 宇立坊

大寒の風になびきて應召旗

小樽市 平井 善慈

乙女子も脚投げ出して日向ぼこ

廣島市 小槻 邦香

紅梅一枝活けて茶室哉

大牟田市 川津 あき子

盲目の共に手を借し花見かな

香川 日向 清圓

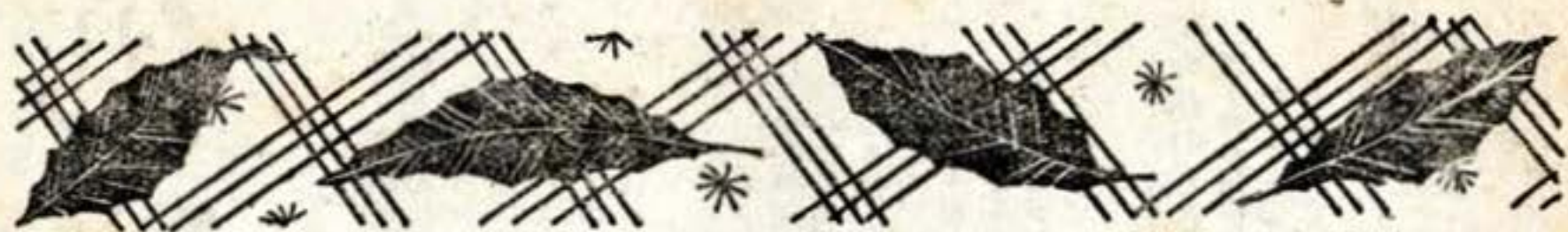
米と薪積みて田家の歳の暮

岐阜 後藤 新八

廣やかに青春匂ひ揚雲雀

投稿規定

官製はがきに一回二句以内
とし「俳壇」編輯部俳壇係
あて送ること。



二つの物語語

吉田 絃二郎

一九一〇年トルストイがヤスナヤポリヤナの邸を逃げて、間もなく小さな驛舎で死んだ時、トルストイ夫人は駆けつけて行つた。だがこの數年來不和であつたトルストイ夫人は終にトルストイに臨終の面會をもゆるされなかつた。

臨終の床に侍してゐた娘さんは「お父さま、お母さまがお見えになりましたよ。お逢ひになりますか」とたづねた時、トルストイは壁の方を向いたまゝ何も言はなかつた。

トルストイはつひに夫人の顔も見ず最後の呼吸を引きとつた。

わたくしはトルストイの臨終のことを思ふ毎に人生の最大悲劇を見せつけられるやうな氣がする。それと同時にトルストイの偉大さを以てしても終にその夫人をゆるすだけの寛大さを持ち得なかつたことを氣の毒に思ふ。無論そこにはいろいろな記録されてゐない内部的な事情もあつたであらうが、

五十年六十年の間妻であり、夫であつたものが死の刹那まで憎み合つて別れなければならなかつたことを考へると、むしろ人生そのもののために寂寞を感じないわけにはゆかぬ。トルストイを責めることもできぬ。またトルストイ夫人を責めることもできぬ。ともかくいたましい因縁であらうか。

x

メレジュコウスキイの三部作の一つ「ピイタアとアレキシス」を読むと、その中に信徒を天國にやるために、三百人四百人の信徒を一つの建物のなかに入れて、外から扉を密閉して焼き殺すことが書いてある。たま／＼苦痛に耐へぬ信徒たちが窓から飛び出して來ると、窓の外に立つてゐる教父たちが斧を揮つて信徒等の頭を叩きつぶし、一撃の下に天國へやつてしまふ光景が描かれてゐる。残忍そのものである。ロシヤには實際にさういつた宗教的な悲劇がかつては存在したの



であらう。

ビイター大帝がその子アレキシスを軍法會議にかけ、終にアレキシスを死刑に處し、最後には大帝自身の手で最後の一撃をアレキシスに加へて殺してゐるが、前の天國行きの教父の仕事といひ、ビイター大帝の行爲といひ、今日のロシア政府當局の肅清作業と關聯したスラヴ民族共通の心理状態であらう。

×

ドストエフスキの作品の中に一本の葱の話がある。

亡くなつた母は無慈悲な人で、一生涯不人情を極めた生活をしてゐた。その子は母に似ず心の正しい人であつたので、死後天國に上ることができた。

しかし天國に上つても、地獄に苦しんでゐる母のことを思ふと氣の毒でならなかつた。そこでその子は自分の心の苦しさを神に訴へた。神はその心をあはれみ

「それではお前の母親を救つてやらう。お前の母親は人間界で何か善事を人に施したことがあるか」と訊ね給ふた。

「わたくしの母は生涯一つとして善事を致したことはありません。一生の中たい一度乞丐に一本の葱を恵んだことがあります。」とその子は答へた。

「よし、それならばその一本の葱を天國から地獄へ落してや

れ。そしてその葱につかまつて天國に上るやうにしろ」と神は説き給うた。

天國からは地獄に向つて一本の葱が投げられた。

子はその葱の一端に絲を結びつけて待つてゐた。

地獄の母親はその葱の端を握つた。絲はするすると天上へ引き上げられた。母親も葱を握んだまゝ天上へ引き上げられた。

それを見てゐた數百の地獄の亡者たちは争つて葱に取りすがり、かの女の手にすがりついて一様に天上へ引き上げられて來た。

かの心の正しい子はどんなによろこんだことであらう。見よ母は一刻一瞬天國に近づいて來るではないか。

然るにその母親なる人は、地獄の苦患を嘗めても猶善心に立ち還らなかつた。母親は自分たゞ一人天國に昇ることを欲した。かの女は自分の手や足にすがりついてゐる人々を蹴落してしまつた。數百の亡者たちはあはれにもふたゝび地獄に落ちて行つた。しかしその刹那かの女が握んでゐた葱もまたぶつりと斷ち切られて、かの女自身永劫に地獄に落されてしまつた。

この物語は恐らく釋尊と蜘蛛の絲の物語から來たものであらう。



さらにドストエフスキイは俱生極樂の佛教的思想をこの物語の中に盛り込んでゐることがわかる。

コロレンコウの「マカアの夢」も有名な物語である。

マカアは大酒飲みであつたが、雪の中に酔ひつづれてゐる間に自分が死んだ夢を見た。そして神の前に立つて裁きを受けた結果は何りであつたか。

マカアの前には秤が置かれてあつた。その秤には二つの秤皿があり、一方は天國行を示し、一方は地獄行を示してゐた。

マカアの生涯の善行悪行が一つ一つ神の前に讀み上げられるのである。そしてそのたんに天國行の秤皿、地獄行の秤皿の上にそれぞれ分銅が積まれることになつてゐる。

マカアはずつと秤皿を見つめてゐたが、自分のためにはたゞ地獄行の秤皿のみに分銅が積まれて、天國行の方へはたゞ一つの分銅も載せられなかつた。マカアは當然地獄行にきまつた。

マカアは聲をあげて泣いた。

その刹那であつた。神はマカアをあはれみて、ぼろ／＼と涙を落し給ふた。その涙はたま／＼天國行の秤皿の上に落ちた。

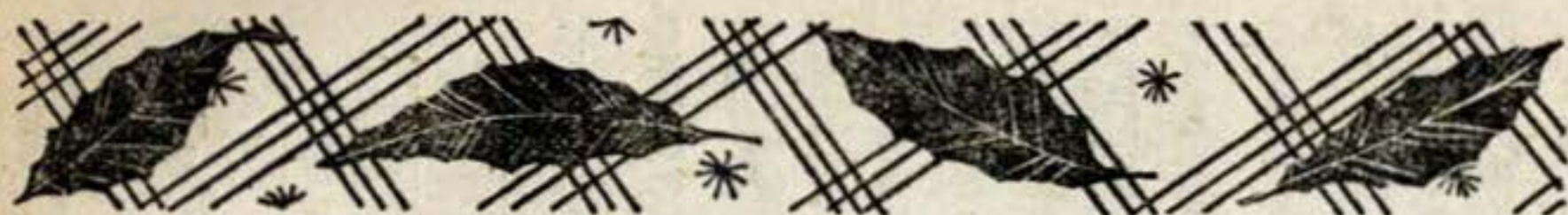
傍に立つてゐた天使たちも泣いた。その涙も同じやうに天國行の秤皿の上に落ちた。神や天使たちの涙の重さは、地獄行の分銅の重さにまさつた。マカアはゆるされて天國に昇ることゝなつた。

コロレンコウのこの物語も恐らく佛教からヒントを得たものであらう。

佛教は佛教としては何處までロシアに入つて行つたか、門外漢のわたくしはすこしも知らない。しかしかういふ風にロシアの文學物の中に盛りれてゐる佛教思想、傳説などを一つ一つ検討して行つたら存外多分に佛教といふものが、スラヴ民族の中にはいつて行つてゐるかも知れない。今日のロシアでは形の上の宗教は禁じられてゐるやうだが、ドストエフスキイやコロレンコウや、さらにトルストイ、チエーホフ、メレジュコフスキイ等を通して東洋的なもの、佛教そのものが今も尙生きてゐるであらう。

×

一粒の種子は農夫の手によりて畑に播かれる。しかしそれと同時に或る時ははげしい嵐に連れられて天に舞ひ登り、遠い異郷に運ばれることもあり、或は渡り鳥の胃袋に納められて、思ひも寄らぬ世界に芽を出し、花を咲かせ、實を結ぶ。



いろいろな方法によつて、一つの宗教をひろめることは必要である。しかしその一つの宗教の幼芽をさらに健かなものに育て上げて置くことはさらに必要である。

すぐれた芽、そしてそれから生まれるすぐれた種子でさへあるならば、遠い何處の世界にも、幾百年の後にも必ず花を咲かし、實を結ぶであらう。

×

去年の一月二十六日に雪崩のためにその愛兒を失はれた方から憶ひ出の小冊子をいたゞいた。朝書齋で讀んでみると、泣けて來て仕方がなかつた。わたくしは自分の心の弱さを歎つよりも、身に引きくらべて人の子のいたましい死のために泣くことを教へられた現在の生活をありがたく思ふ。

わたくしたちはどうする力も持つてはゐない。しかしその愛子を失つた人の心を察してひそかに合掌することをゆるされてゐる。

けさは鶯も鳴き、櫻も咲き、露の瀼も出た。

生き残つて自分ひとり春の光りを浴びることを心苦しく思ふ人も多いであらう。

けさはまだ薄暗い中から庭の竹山に來ては山鳩が鳴いてゐる。けふは三月十六日である。けふからは都會の鐘砲打ちもやつて來ない。秋までは庭に來る山鳩も安全である。

御法語 念佛について

本願の念佛にはひとりだちをさせて、すけをさゝぬなり。すけと云ふは、智慧もすけにさし、持戒をもすけにさし、道心をもすけにさすなり。善人は善人ながら念佛し、惡人は惡人ながら念佛して、たゞむまれつきのまゝに念佛する人を、念佛にすけさゝぬとは云也。さりながら惡をあらため、善人となりて念佛せん人は佛の御心に叶ふべし。かなはぬ物ゆへに、とあらんかゝらんと思ひて決定心おこらぬ人は往生不定の人なるべし、

念佛を申事様々の義候へども、只六字をとなふるばかりにて一切はおさまりて候也。意には本願をたのみ、口には名號をとなへ、手には數珠をとり、つねに心にかくるがきはめたる決定の業にて候也。

念佛の行は、本より行住坐臥時處諸縁をえらばず、心の不淨をもきはぬ行にて候へば、易行往生とは申候也。只淨土を心にかくれば心淨の行法にて候也。

人をもかやうに御すゝめ候べし。さやうにつねに申させ給はんをば、とかく申すべき様候はず、我身も知るべくて、此度往生すべしとおぼし召し候べし。ゆめくこの心能々つよくならせ給ふべし。(本會發行「法然上人法語抄」一一一—一一三)



來 聽
歡 迎

信仰
座談

佛教の立場を語る

佛教の獨自性を知れ

○基督教の神と佛

新井嘉門氏「基督教の神と佛とは違ひますか。」

中村辨康師「佛陀と神とはその思想内容が違ひます。基督教の神思想の成立基底には、イスラエル民族宗教のエホバ神の考があります。つまり、大有とか大力とかいふ考です。宇宙を創成し支配するとみる神格觀念です。」

新井氏「イエスは釋尊と同じく肉體上の佛と言へますか。兩者ともその教の最後目的は人を救済す

ることにあると思ひますが。」

中村師「イエスとゴータマ世尊とが全く同一の内容の悟ならば同じと言へます。勿論宗教の究極目的としては同じものがあるでせう、然し、佛教では神を認めないのでから、兩者の信仰内容を一なりとは言ひ兼ねるでせう。」

新井氏「神は、つまり、宇宙の本体ですか。」

中村師「そう言へるでせう。ただ佛教は人間生活の上の覺を求めるので、世界の究極の根元など論じはしません。鬼神は語らないのです。佛教は大宇宙に生き動く大

生命を見るが、小生命を有と固執しない。又大生命を有と固執しない。恰かも肉體を形成する小細胞が別々に生きるのみでは、本當の生の姿がない、と同様で、大生命と一になつて生きねばならぬといふのです。」

大井、尾崎傳次郎氏「大生命と一になるとは結局全體的にゆくことですか」

中村師「個々が生きつつ、而もそれが全體と共に動かなければならないでせう。」

○支那の天と佛

新井氏「支那の天と佛とは違ひますか」

中村師「違ひます」

道も違ひますか。同じでせうか。」
中村師「日常の具體的生活の上に道德的に現れてくる側は同じでもあります。勿論宗教生活は道德生活より深廣なものです。何時かもそれはお話ししました。つまり、大生命を個有とし大有力とする如きは存在觀に立つものです。通常我々は存在觀念の上に生活するので、存在觀の上の説は分り易いが、佛教の如き存在觀でなく生命觀に立つ見方は分りにくいのです。西洋的考方は東洋に對すると著しく存在觀的です。科學の發達もそれを基としてるでせう。東洋人はいづれかといふと生命觀的ですが、それを眞に徹底せしめたものは佛教です。」

○日本の神と佛

尾崎氏「畏れ多いことですが、聖上即阿彌陀と仰ぎまつてよい

◇例會だより◇

「淨き友の會」の前號以來の例會は左の如く催された。

第十五回 二月十二日、講話「不二の空門について」

第十六回 二月廿六日、講話「諸法空相、般若實相について」

第十七回 三月五日、講話「空中無相空中無法といふこと」

第十八回 三月十三日臨時會、講話「無所得の心」

いよいよ中村先生の般若心經講話も終りに近づいて、講話は佛教の深い道理に喰込んで、人々の心を佛道の中に驅り立ててゆく。座談も一層親密を加へて、それぞれの心裡を吐露せられるので、これ又講話と共に、貴い記録を會毎に人々の心に残すのであつた。讀者諸友の参加を希望します。

でせうか。左様に説く方もある由ですが。」

中村師「我々信徒としては勿論そうです。我等が大御親として國民の生命の擔所であり歸宗であらせられるのですから。」

新井氏「日本の神も佛と違ひますか。」

中村師「神の語源説は色々ですが、大體上を意味するとされます。

また方は香、幽、隱、ミは身、實、満などと言ひます。ホトケは佛陀の異音譯から來た浮圖家の訛りとも、煩悩執着の解脱の意とも言ひます。その思想内容は全く違つて

ます。一體神の字は支那のもので示扁は天の古字で神明を指し、申は電を示します。精神とか靈とかの意です。基督教のゴッドは日本でこそ神と譯しますが、支那では天といつてます。何れも廟を借り

て母屋を取るの類ですがその意味内容は同一ではない。斯様に思想内容の異なるものを同一かと比較することは無理です。違ふものを同じかときくことになりますからね。佛教の獨自性を追求したいものです。」

新井氏「はあ、分りました。」

中村師「佛の本當の意味を知ることが大切なことでせう。貴方のお尋ねはローソクの火と炭の火と同じかと尋ねるのと同じやうなものですよ。」

新井氏「そうですね。但、熱いといふことが同じでせうけれど」

中村師「さやう、その點はあります。性質發生は違ふが類同も認められることはあるでせう。」

平野潤一氏「無量壽には未來觀があると思ふが、支那には未來がない。」

中村師「西洋には過去がないともいひますね。」

平野氏「未來觀まで考へて永遠性の上に生きなければ本當でないと思ふ。」

存在觀を打破する

○日蓮宗の本尊と阿彌陀佛

中村師「歴史的存在ではないと信ぜられぬとする人は餘り個在觀念に執はれ過ぎてゐます。」

宮良正備氏「私の友人で日蓮宗の熱信者がありますが、私に、日蓮宗の本尊は釋尊である阿彌陀は假空だ。實在の釋迦を信ぜねばい

けないと主張しましたので、釋迦も彌陀を信じたではないか、歴史に執はれるのは餘りに個在觀念だと、答へたことがありました。」

中村師「結構です。しかしその信者はまだ本當の日蓮宗の釋迦佛

を知らないと見えます。日蓮宗では釋迦に本佛と迹佛とを立てて、久遠實成の本佛たる釋迦佛を信ずるのです。故に阿彌陀佛假空ならば、本佛また假空でなければならぬ。然るに久遠の本佛を迹佛と混同してゐるのでは、その人はまだ日蓮宗をよく知らぬことになる。歴史的釋尊ではなく、本佛の釋迦牟尼佛です。然し、本來釋迦は迹佛のみに言ひ得る名です。釋迦は民族の名ですし、牟尼は最も尊敬するに足る人の意ですから。ただ本佛を示さんが爲に迹佛が現はれたとするのです。

我々は存在觀を打破して生命觀に立たねばなりません。

○萬世一系について

畏れ多い話ではあるが、我が國民の誇りとする皇位の萬世一系も存在觀念の上に立つてではならな

い。皇位につかせられたるは、永遠無窮の明つ神なりとし現人神なりとして尊崇し拜しまつらねばならない。一系の意は單なるちぎれちぎれのつながり、個在の連續の意であつてはなりません。生命觀に立つて理解しまつらねばならない。生命觀に立つ時、始めて小我を捨てて大同につき小我を捨てて大我につくことが出来る。眞に國運に身を捧げることが出来る。進展する所に身を捧げ得る。永遠無窮に伸びゆく家運國運の上に立ち得る。然るに個在のみよしとするのでは、結局利己主義功利主義に陥るであらう。眞の利他、眞の無我奉公の精神は現れ得ない。個在觀念に立つたならば死せば全ての終りであるから、七生報國の如き赤心の發露も亦た見られない。天地の大生命につき大正義につかんと

する時天地の大道に則ることが出来る。個在的に日本がよくなればよいではなく、天地の正義に則る日本の大道の發展につとめ、信じ進まねばならぬ。

かやうに、生命の伸びる所に生き従ふことが大切です。例へば子供を育てるにしても、その子の生命を伸ばしてやる、本質生命を育ててやるといふのでなくてはならない。番頭さんが小僧さん等を使ふにしろその人々の長所を生かしてやる。そこに生命觀に立つ見方がある。

○念佛のすがた

ただ本體的のものがあつて、それを信じてゆくといふ丈ではまだ浅いのです。大生命と共に生きてゆく態度とならねばならぬ。例へば細胞が個體に對し、國民が國家に對する如き、かゝる關係であらう。

個在の固執に眞の生はない。大生命の保全に天地の大道が輝くであらう。そして、正に斯くあらんとする姿が念佛生活なのです。」

本能と道德及び宗教

○人間本能と道德及び宗教

平野氏「人間の本能には善惡何れが合致するか」

中村師「本能は人間生活に必然的なものです。だがそこには自ら守られねばならぬ分、即ち度合があります。所謂、應分・隨分・自分がそれです。ただ本能の動くままに従へばよいといふのでは、過分であります。意馬心猿と申しますやうに、六窓の猿、奔走する馬が生物的な心の動きの状態でありますから、どうしても本能のたづなをとつてゆかねばなりません。そこに道德が必要となるので

す。かやうにして、分に應じ、分に隨ふところに自分があるのであつて、過分になつてはその身が立ちませぬ。佛教では、本能的な心の動きの儘に任すのを、六道輪廻の姿となし、これこそ此の上もなき苦の姿なり、迷ひの姿なりと、道破いたして居ります。三寶歸依が正しい姿であります。」

平野氏「人間の本能には欲望が動いてゐる。」

中村師「佛教で五欲と呼んでるのが人間的本能のことです。それを淨化する、否な寧ろ聖化してゆきたいものです。勿論、仲々化し難い。そこに念佛の姿があります。三寶歸入の姿があります。」

○自律と他律

平野氏「化さないで律法等で抑へるのがある。道徳や法律等。」

中村師「他律自律といふが、法

律や社會制裁、道徳等は他律で、抑へつけられて守るのではとても苦しい。之に反し信仰心及び良心からするのは自律で、自策自勵してゆける。然らば良心丈でよいではないかといふと、それは違ふ。道徳的良心といふものは、時代や社會と共に變るものです。昔は復讐は立派な社會道徳であつたが、今は許されぬ。ぶたれたからぶち返したでは喧嘩で、道徳的良心とは申せぬ。良心も變るものです。」

○眞實の道

平野氏「『人の道』などといふが寧ろ『神佛の道』でなければならぬ。『心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神やまもらむ』といふ誠の道とは何か、即ち神・佛の教を標準とすべきであらう。」

中村師「人間の善惡好惡等は甚だ相對的なものでして、惡なども

元來害蟲でありますが人間にとつては益蟲の尤なるものです。人間の標準は自己中心ですから相對的でしかない。絶對的なものに頼らねばなりません。信仰心は心の鑑で、此の鑑に照し合せて進むべきでせう。如來照鑑したまふのです。しかし、多くの宗教的戒律、律法は、神的制裁の畏怖からで眞の自律でない。それは、因果觀に立つものだからです。因果應報だけでなく、縁起觀に立たねばなりません。それが佛教の教です。悪い種でも耕作の仕方等に依ては良い結果を獲るし、善い種でも野放圖にして置けば悪い果實しか獲れぬ。因果律でなく縁起觀に立つとき、存在觀を打破して生命觀に立つとき、始めて不惜身命の大勇猛心が湧き起ります。無我の心になれます。

念佛は縁起の姿であり、大生命に歸入する姿であります。多年煩悩のとりことなれるものも、信仰の力に依て、生命の道に歸入出来る。極重惡人こそ救ひますと古人も歎んでゐる。此の如來の本願力に隨順してゆかねばならぬ。かゝる本願力の有難さが感ぜられねば感ぜられぬで、親鸞の如く、かゝる愚か者なればこそ、念佛以外に救はれる道はないことを確信せられたいものです。かやうにして如來の大生命の中に南無してゆく處に眞實の道があります。云々」

(以下次號)

本會はどなたでも參會出來ますから、十六頁掲載の案内を御覽の上奮つて御出かけ下さい。會費は不要です。

江戸の法然上人

松本亀松

法然上人傳の研究家でない私には、雜書を讀む間に目につく、上人に關する文獻が如何にも興味深く感ずる。珍らしくもないものを喜んでゐたり、「江戸の法然上人」など、トテツもない表題をつけたりして、専門に御研究の方々から叱られるかも知れないが、そこは素人の勝手放題と御見逃しもあらうといふもの。兎に角、江戸時代に限つて、上人には三度大師號を賜つて居るし、御開帳は數知れぬ程あり、而も巡拜の撰まであつてみれば、佛法的な見地からしないでも、上人は生きておられるといひきれる。そこに此の表題もある譯で、ボツボツ讀集めたものを年代順に並べてみたい。

併し、是が完備したものではないこと勿論

なので、續稿、續々稿も因縁といふより事實に於てお目にかかれよう。

蓮生坊宛の書狀

蓮生坊といふ名は、芝居の好きな人なら綺麗に刺つた頭をなでまはして、十六年は夢だ、夢だといふ、熊谷次郎直實が出家した場面を思ひ出すだらうし、諸曲の好きな人なら「敦盛」のワキのセリフ「熊谷の次郎直實出家し、蓮生と申す法師にて候」を思ひ出すだらう。此の蓮生坊に宛てた上人の書狀について、浪華の狂言作者濱松國が、其の著「陽落總集」の中に記してゐる。書狀の全文を示すと、

名號なり、うたがひはその身の因果たるべし、假に來つて無常を知らず、電光石の光ありて、あらねぬ露の身の消へんことの、目の前に殘るものとて、名ばかりを長くおもへる人心、只何ごとも、南無阿彌陀佛といふので、是は六字の名號に添へられたものであつた。謂國は俗に解し安くして、いと有難きものなる故、爰に出して諸人に知らしむるなり

と書いてゐるが、成程再拜九拜するも及ばぬ有難さである。そして「決定心を垂いて稱名門に入り、他力本願を以て擊發勸掖し、一家の業を創立した、大上人の境涯を揭示して餘りあるのを感じずる。

因みに、此の書狀は行基菩薩開基の靈場としてばかりでなく、秀吉公曾遊の庭があるので有名といはれる、大阪府豊能郡細河村伏尾の眞言宗久安寺に、寶物として傳承されてゐる由である。

さて、以上の様な隨筆的記述は、江戸時代の雜書には非常に多いのであるが、上人の年代記的な記録をあげるとなると、先づ元祿六癸酉年春に、江戸で張行された開帳をあげなくてはなるまい。それは、作州の誕生寺にある上人の自作像が、江戸に出開帳されたもので、たゞ残念な事には月日と場所を逸したまゝになつてゐる。(増訂武江年表)併し、現在私が書抜いた限りでは、是が江戸に於ける上人最初の開帳である。

圓光大師諡號

是から五年後の元祿十丁丑年正月十八日上人は圓光大師の諡號を賜つた。

元祿十四年の春、征夷大將軍兼左丞相綱吉源公朝に奏し、勅して圓光大師と諡したまふ。

と「本朝高僧傳」卷十三にあるが、諡號を賜はる前後のことは、「贈圓光大師號繪詞」に詳しい。

抑々大師號については、本山の四十二代

白譽大和尚が、常に心にかけた願であつたが、高祖の冥慮も廻り難いので、ある時その遺願を知るために、御影の前に至心精禱して、三度圖をとり、その願であることを知つたのであつた。

其の後元祿八年の春、入院の願を申すため、江戸へ参向した折、城中に召され、將軍家に謁したが、大和尚は此の將軍家の治政に時を逸したら、他に機會はないと感ずるところがあつたので、増上寺の貞譽大僧正の同意をもとめ、大僧正の隨喜するのを見たが、此の大事を事の序に申出することは、輕忽のおそれがあるといふ、大僧正の意見で、昔時叡山功德院の舜昌法師が、勅によつて撰した四十八卷の宸翰の御傳と、白譽大和尚の上人略記とを柳澤出羽守保明に送つて、大和尚は一先づ京都へ歸つた。斯うした事があつて、約一ヶ年半を経た元祿九年七月廿五日、貞譽大僧正は出羽守をたづね、諡號の事をのべ、都鄙の門徒總べての願望であると申添へた。そこで、出

羽守から將軍綱吉に申達せられたところが、將軍家は上人の高徳は既に知るところであり、而も、昨年勅集の御傳が差上られてあるので、出羽守の進言について、其の年の十月六日、大僧正を江戸城に召し、大師號奏上のことを仰出された。一方京都へは書面をもつて通達され、同じく十月十二日、小笠原佐渡守長好の役宅で、傳奏瀧川丹後守利庸、水野備前守勝直立合の上、白譽大和尚へ達せられた。

大和尚は申すに及ばず、京都の喜びは一通りではなかつた。早速、常陸院九保を傳使として、御禮のため關東につかはす事となり、此の使者は十一月朔日登城し、同三日には公式に本山への奉書が渡された。

久方の月の都には、なほかくれなき高祖の盛徳なれば、贈號の御事にいさゝか異論もなく、まして關佐よりの御執奏なれば、本寺の上表にも及ぼして、朝議すでにさだまりにけり、

と記されてあるが、ある宗の高祖の贈號に對して、本寺から上表したにも拘らず、そ

れが不成功に了つた事が、其の頃あつたのだから、此の一文には特に注意を要するの
で、それだけ喜びが大きかつたにちがひな
い。

贈號の盛典

さて、諡號仰出される日は、元祿十年正月十八日と決定した。近衛關白基熙が總帥となり、一切の事務が執行はれ、傳奏には柳原前大納言資康正親町大納言公通、上卿には松木權大納言宗顯、職事には日野左少辨輝光、勅書作進には唐橋侍從兼文章博士大内記在隆、勅使には伏原少納言宣通が仰付けられた。

斯うして贈號の勅使が知恩院へ來臨の日が來た。洛中の貴賤はいふまでもなく、邊士近隣の者まで、見物のため、結縁のために押寄せ、淀の河原も所せまうと記される程に群集した。

知恩院に大内の樂人備前守多の忠胤をはじめ十二人が烏帽子直垂を著して、壇前に

並び白譽大和尚が唐門に進むと、亂聲を奏しはじめた。その行列の堂々たることは、出仕の僧侶一千餘人といふのでも想像出來よう。詳細は略すが、さしも廣大な堂内に充満したといはれる。

勅使は辰の刻に先求院まで參入し、巳の刻に參堂した。此の行列も未曾有の盛事を飾るに十分なものであつた。そして儀式通り式次が行はれ、大和尚はじめ大衆全部が平伏すると、宣通によつて勅書が奉讀された。

勅王法興二佛法二比等内外貴典章一朝家同二釋家二定律都鄙仰興盛二淨土開宗源空上人先究三聖道教二后關二淨土之宗二諸二彌陀誓願胸次二感善導提撕於定中二觀寶樹照二妙境二内證益明歩金蓮現二靈光二密因忽露即是肉身如來何疑勢至權跡三朝帝師德重二于末代二皇代廣布二卒土二法要永傳普天二特謚號二圓光大師

于時元祿十丁丑年正月十八日
以上が勅書の全文であるが、讀をはると

大和尚は歡喜の涙に紫衣の袖をぬらした。列座の衆僧も、參詣の男女も隨喜の泪にむ

せばぬものはなかつた。洵におそれ多い事だ。

大和尚の祝辭は長文のため、こゝに轉擧はしないが、やがて大和尚によつて、諡號の四字が大書され、御影の前に掲げられると、堂上庭前數萬人が一南無圓光大師、南無阿彌陀佛」と高唱し、その聲は山に響き、谷にどよめいて、衆徒の喜びはその絶頂に達した。

是でさしもの盛儀も目出たく終つたのであるが、皇恩に感激した衆徒を代表した意味で、二月朔日大和尚は、諡號奏慶のため參内してゐる。時の天皇は 東山天皇である。

東漸大師諡號

皇恩の有がたさは、是にとどまらず、圓光大師諡號の事があつて十五年目、中御門天皇の御宇、寶永八年卯年正月二十五日、恰も上人の五百年忌に當り、東漸大師の諡號を賜つた。(増訂武江年表) 一書に、勅使

宣命は十八日と記されてある。

此の年、正月十一日、先づ所司代から駿馬五駿、足輕五十人が知恩院へ差向けられ、十八日まで常火消の役に當つた。是で如何に難路をきはめたかを知る事が出来る。

十二日には知恩院の山門に、仙洞の御宸翰篆字金泥による華頂山の額が掲げられた。長さ八尺、一説には一丈一尺横五尺の勅額であるが、宗門の光榮は今日に於ても、察するに餘りあるものだ。

十八日には勅使の宣命があり、畏れ多いが勅書は次の通りであつた。

勅圓光大師勢至權跡、惠日煦々、高輝三台嶽之上、宗風穆々、始開淨土之源、念佛三昧、深示群聖之蘊、誓畫紙、固結四衆之心、非師之泛慈航、誰離苦海、每人能乘寶筏、自迷川、遣教遠爾、設歷五百星霜、功德浩然、爰徧六十州郡、仍重寵章、加謚東漸號、

寶永八辛卯年正月十八日 平松少納言

二十二日には舞樂法事、勅會があつた。

同日の導師は知恩院宮尊統親王、先づ着座あつて、西園寺大納言致季、日野中納言輝

光、六條宰相有藤が着座した。尙、此の日の諸役は次の通りであつた。

樂行事

持明院中將基雄、綾小路中將俊宗
布施取扱殿上人

唐橋侍從在康、梅小路右衛門左定代、
豐岡右兵衛佐資時、岡崎右衛門佐國廣、
高丘侍從季敦

執綱

藤井民部權大輔、澤修理大輔忠量

執蓋

慈光院極藤仲學

奉行

甘露寺左中辨

衆僧前、諸大夫

小林主税頭、藤木下野守

堂童子

津幡刑部少輔、難波右京亮、高橋大隅

守、藤木右近衛將監

樂人 五十八人

翌二十三日には、六齋念佛が執行された。

太鼓の人数百五十人餘とあるから、相當大がかりだつた事が知れよう。

兎に角、元祿の折にもさうであつたかも知れないが、今度の年忌法事の總入用は、

徳川幕府が悉皆始末をしたといふし、知恩院宮へは將軍家から、下行米三百石がおくられた由であるから、京都及び江戸をあげての、所謂國家的の盛典であつた譯で、恐らく御即位、宣下にもつぐものであつたのだらう。宗旨の記録として誇り得るものであると同時に、佛教界にも記録さるべき事である。

以上は「月堂覺醒集」によつたものであるが、此の法事のため知恩院宮及び本山から、勅使、着座以下の人々へ、夫々着出した禮物等の事については、餘り長くなるので割愛したい。(つづく)

支部便り

臺灣支部主任田村智學、北海道釧路支部主任藤井乘傳、兩氏は淨土宗宗會にはるばる上京されたので、本部では一夕兩氏に地方支部の状況をおきゝしたが兩氏とも熱心に地方の信仰状態を語り、今後更に本部との連絡をきん密にして支部發展に盡すべく約束された。

(慰問淨土寄附者芳名は次號に發表)

信仰談に華咲いた

第一回 「淨土」讀者の會



(寫眞説明)

上は當日の會場一部、
下は立石鉞一氏

三月十五日に第一回「淨土讀者の會」を開かうと云ふことになつた。始めての催しで

信はあるが、かう云ふ會がどの程度まで成功するか見當がつかない

はあるし、蓋を開けて見るまでは心配でならなかつた法然上人鐵

い。最初は極く内輪にやるつもりで會場も日比谷松本楼に選んだのである。招待状も内輪に見積つて、宗門の方々は招待状をお出し

五ヶ年、淨土一創刊以來四十七號

しなかつた。

愈

當日である。五時頃に

めかけて来る。第一番に馳け付けたのは本誌寄稿者生田花世女史、

女史を皮切りに支部長、支部員、愛讀者、寄稿家、宗門内外の諸名

士が踵を接して來會、六時頃にはとうとう座席が超満員、本部員は

來會者に失禮の無いやうに席を作るのに天手古舞の騒ぎである。

「これ程の盛會になるとは思はなかつた」とは今更に己が認識不足をかこつ本部員の嬉しい嘆聲である。椎尾博士、吉田絃二郎氏、立

石欽一氏里見淨土宗執綱、江藤、木村各部長に混つて新潮社の中根駒十郎氏、講談社の西原長康氏らの顔も見え來會者九十名の盛會さ。

和氣暖々裡に夕食をすませて六時半から座談に入つた。

づ總起立の下に宮城造拜皇軍の武運長久祈願

先

三寶禮、光明照益のおつとめの後司會者本會主事佐藤賢順氏の挨拶があつて、椎尾辨匡博士の講演「法

があつて、椎尾辨匡博士の講演「法

然上人と現代」に移つた、(別項に概略掲載)續いて吉田絃二郎氏が悩み抜かれた深い信仰の境地をしてみゝと語られ「人間は年をとると故郷に歸ると云ふ、日本人は結局東洋の佛教に歸つて來るのである。靜かに佛間に座して香を焼いてゐる時が、本當の私の姿の様に思はれます」と深い感銘の裡に言葉を結ばれた。

續いて立石鉉一氏が、法然上人を祖先とし、キリスト教の熱烈な信者であつた祖父の影響の元に生長した自己の心境、坂田良弘上人の感化などに就いて語り、法然上人の御遺徳を讀へられる。

更に遙々房州から會に参加せられた和田正系博士は雑誌「淨土」の優れた感化力に就いて詳はしく例を引いて話される。次に生田花世女史が、爆撃に散華した勇士が

ノートの第一頂の眞中に大きく南無阿彌陀佛と記してゐた事に念佛の眞精神を感銘的に語り、

在

家の人だけで支部を組織されてる巴町支部主任稲穂澤二氏、本郷淨き友の會支部主任橋本樂榮女史が雑誌「淨土」



氏郎二絃田吉の夜當

と本會の事業の教化的意義を語つて、それぞれ深い感銘を與へられた。

最後に本會理事、淨土宗教學部長江藤滋英師の挨拶の後、參會者總起立、全部打揃つて回顧を行ひ實に賑々しくこの意義ある會を閉

の會が豫想外の大成功であつたことは本會の責任愈々大なるを痛感せしめた。

そして第二回「讀者の會」は、最初でもあり會場の設備その他に色

々と缺點を挙げれば挙げられる第一次のそれを充分に反省してもつと落付いた、更に内容の充實したものにしたといふ研究を進めてゐる。

當日の來會者

(御到 蕭順)

生田花世、原田美之助、間部詮輝、幸野きぬ、栗田田鶴、岩寄信翁、鳴海要吉、岡部彦次郎、原田伍作、原田筆子、原田俊子、志賀親雄、吉水辨道、澤幸江、神野信雄、小泉はる子、稲穂澤二、吉田耕作、石川巳之助、水野すゞ、高橋作次郎、佐々木利正、松井捷江、坂本節、眞溪蒼空朗、木村良祐、吉水靈家、江角金市、小山靜子、小澤迪子、一瀬直行、渡邊榮子、中村辨康、佐藤賢順、佐賀一海、道瀬幸雄、松本小枝子、島野禎祥、鈴木金平、尾崎傳次郎、渡邊喜代、名取義一、椎尾辨匡、佐々木沖太郎、市川多子、山中婦起子、中村壽江、石丸勢來子、小島健三、阿掛保子、江藤滋英、石川幸助、木村玄俊、嶺淨信、森本祐顯、高瀬磯、川端祐輔、里見達雄、杉浦演順、橋本樂榮、佐藤良智、佐藤密雄、海老名さと、和田正系、吉田せき、金孝敬、名取幸二、松本定子、立石鉉一、大鹽一見、金田明進、中村康隆、吉水欽雄、齋藤榮三郎、佐山學順、吉田絃二郎、中根駒十郎、西原長康、鈴木良全、加藤弘、赤尾光雄、長田たい子、濱田正太郎、稻田稔界、柴田啓治、秋田春、千葉寛定、宮良正備、

現地だより

石嶺山の月

浄土宗 中野隆雄

天橋下村を出た頃は十月の中頃であつた。

内地ではセルの時候であらう。秋の真中で、村や町の氏神の祭禮に若い人は勇んで軒提燈の下を歩き廻る時候であらう。實際に兵隊達は月の夜の露營に背囊枕に故郷の秋祭りの思ひ出や自慢話に更るのだつた。そして睡りに落ちれば、夢は遠く村の森に、町の神社に、もみ合ふ御輿に、はしやぎ切つた弟や妹の許に通ふのだつた。

その秋も中ばの十月中旬に江南の戦線は百三十度の暑さだ。暑いからと言つて戦争を止める譯には行かない。私たちは玉の汗を流し平和の敵と戦はねばならないのだ。

十月九日早朝故郷の夢をかなぐり捨て、出發、山間の隘路を前進した。一里半程來ると、峠の頂きだらう。一番狭い所に出た。廻りくねつた山路、峠の向ふ側には數ヶ師の敵が皇軍の出るのを待ち構へてゐる。横の方にもゐる。敵はゲリラ戦で來るつもりだらう。

部隊は峠を越さず待機の姿勢に入つた。同時に戦闘指令所は右側の山の上に設けられた。山に登つて見れば、廻りの山は皆な敵だ。うっかり顔も出せない。

これから、澤山の犠牲を出した岩嶺山の激戦が始まらうとしてゐるのだ。

十時頃に右側に廻つた一ヶ大隊が敵と出會

つた。豆を煎るやうなチエツコ銃の音が聞へて來た。それに和するやうに前方の敵からも物凄く打ち出したので戦闘指令所には敵弾が雨の如くに飛んで來る。

山の下道路には馬撃場がある。こゝに迫撃砲弾でも落ちたらことだ。敵の銃聲は後の山にこだまして何十倍にもなつて聞へる。時々敵の姿を見つけたのか友軍の重々しい重機銃の音がこだまする。

激戦の幕は切つて落された。指令所の電話はひつきり無しに敵狀や戦果を報告して來る。銃聲がいよゝゝ激しくなつて來る。前方の山にも友軍の攻撃が始まつた。二大隊だ。木の根、草の根を楯に一步一步と敵に肉薄して行く姿が觀測機からよく見える。兩軍の銃聲は山々にこだまして、戦友の話聲も聞きとれない位だ。ダツ、ダツ、ダツ、ダツ、といふ音は幾十倍にもこだまするのだから、その音は大變なものだ。右側に廻つた部隊は突撃でもしたのだらう、遠く戦線が聞へる。ヒューツ、／＼と飛んで

来る敵弾はそばの松や檜にブスブスと當る。木の葉が吾々の頭に落ちて来る。

二三日前の戦場に重砲を澤山打つたせい

か空模様が変わりなつて来た。急に薄ら寒い風が吹き出したと思ふ間もなく、ボツ／＼とやつて来た。戦闘は酣だ。

弾と雨がごつちやになつて降つて来る。これこそ本當の砲煙彈雨だ。雨のためか薄暗く、厭な模様になつて来た。突然ビイビイ……と異様な音が頭上を飛んで行く迫撃砲だッ！ 来た来た、来た来た。戦闘指令所の前にも来た。

後にも来た。そして畑にも来る／＼、集中射撃だ。のびた弾は山を越へた狭路に落ちる。迫撃砲弾だけは何處へ来るかわからない。次々に来る砲弾は段段のびて山の狭路に落ちた。指令所を飛出して行くとさあ大變山の下では人馬の死傷者が澤山出来た。

私は山を下りた次々と倒れて行く將兵の回向に、手當の援助に努力を盡した。戦友が戦

死した友を始末する間、讀經する、念佛を誦へる。弾は相變らず来る。敵は最後の總攻撃を開始したらしい。私は何回か砲弾の破片や



銃弾に見舞はれたが、回向は止めなかつた。三十分もすると山々にこだまする砲聲銃聲も少

なくなつた。敵は退却したのだらう。物凄く砲撃は敵の退却前の足掻きで、そう云ふ時には敵は何時も目茶苦茶な旨打ちをやる。戦死者の回向をすつかりすませて、指令所に上るとその附近にも迫撃砲弾の跡が澤山ある。相當山の上にも落たらしい、山の上には犠牲者はなかつた。私は山の下模様を副官に報告のため指令所に行くと、部隊長の前に將校二三名と澤山の兵士が集つてゐる。銃聲はたまに思ひ出した様に聞える。

一人の支那兵が部隊長の前に引き出されてゐるのだ。この支那兵は先程の戦闘に唯一人トーチカの中に残つて皇軍に機關銃の銃火を浴せてゐた勇士だ。きりツと締つた口元、鋭い眼光、支那兵には稀れに見る偉丈夫。皇軍の猛攻撃に敵は全面的に退却したのに、唯一人踏止まつて抵抗した勇士だ。部隊長の尋問に對して一言も答へず

「俺も晴天白日旗下の武士だ。さあ殺せ！」

俺はお前達の敵だ、お前達の戦友を殺した敵だ。さあ殺せ！ 俺は晴天白日旗の下に死ぬのだ！」

と叫んで、仲々白状しない。遂に部隊長は「惜しい勇士だが殺してやれ」と一言、その時私を見付けた部隊長は「中野君、此奴に引導を渡してやつて下れたまへ」

私は返事をすると同時に、兵士と共にその捕虜を連れて、さつき掘られた砲弾落下の穴の所に行つた。捕虜は無言で穴の前に立つた。岩嶺山中腹の薯棚の一隅である。

雨は上つたが、どんより曇つてゐる。私は静かに讀經を始めた、そして十念を誦へ終つた時、皆をにらめ付けてゐた捕虜の顔色が急に變つて來た。そして涙さへ流してゐる。

『待つて下さい、状況を皆話します。』と神妙な態度で黨軍の状況をすつかり話した。

『よし、お前の生命は助けてやる。これから日本軍の一員となつて東洋平和のために働け』

部隊長は彼の肩をたゝいた。捕虜は涙の顔

を上げると

『私も中華民國の武士です。自國の不利な事を申上げた今、生き長らへるのは厭です讀經して頂いたお禮です。私も安心して死んで行きます。早く殺して下さい』と訴へるのであつた。

皇軍の將兵はそのいぢらしい心根に皆泣いた。そして涙で取り上げた銃から一發、二發銃聲がすると、晴天白日旗下の勇士は、ニコリ笑つて自軍の砲弾が穿つた穴に落ちて行つた。

最後まで踏止まつて皇軍將兵を惱ました敵の勇士は安らかに笑つて往生をとげた。

私は兵士と一緒に靜かに土をかけ、墓標を立て、念佛を誦へてやつた。何時しか私に和して澤山の念佛の聲が聞へて來た。

岩嶺山中腹の薯棚の露と消へた勇士、彼もまた東洋平和の尊い礎となつて行つた。

勿論その夜の中に、岩嶺山は皇軍の手に歸し、敵の姿は一人も認めることが出來ず、放つて逃げた虜やトーチカは雲間を切つて顔を

出したお月様に照されてゐた。十月十日残暑きびしい夕方の出來事である。

(二九頁より)

「五逆十惡の者も生ると信じて」出來る限り「小罪をも犯さじと思ふ」べきでありませう。そして其過去の罪が時々思ひ出されて暗い氣持になつた其瞬間に「南無阿彌陀佛々々」と懺悔し、續いて尙更に「南無阿彌陀佛々々々」と如來様にすがつて行く痛切な心が湧く其心境を消して仕舞はず、千遍と云ふやうな簡単な事でなしに心の續く限り稱名をなさるやうおすゝめ致します。其處に「如來攝取」の姿が如實にあなた御自身の上に現はれて居るのです。仕事しながらの念佛でなく、念佛の中の仕事として御職業にも精進し愈々益々御信仰を増進して下さい。

KH君へ御答へします

増上寺の日曜講演は現在ありませんが、計畫中と承つて居ります。

淨土教より見たる般若心經講義、何れ機會があつたら掲載することになるかも知れません。

團基談義 袋井寛

— 義 談 基 團 —

(53)

兼好法師が「團基雙六好んであかし暮す人は、四重五逆にもまされる悪事とぞおもふと或聖の申ししこと耳にとまりて、いみじく賢え侍る」とその徒然草の中で、いみじく後世に書きとめてゐる。ある聖とは一體どんな高僧聖人であるか知る由もないが、譬論とは言へ、殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血の五逆にもまさるとはチと大袈裟である。

パチリと心地よい基盤を耳に對局する雰囲気の中には、いさゝか軋めいたものさへ感じられもする。ところが五逆四重よりも大きな悪事とは、團基といふ遊びの立場からそれによつて起る半面の弊害をモラルの方から批判したのであらうが、ひとつ兼好法師に一局打たしたならもつと面白い徒然草が遺されたか

も知れない。ところで、わが國一世の名人本因坊は京洛寂光寺の僧侶であつたのだから、世の中はまことに皮肉に出来てゐる。

古くから團基は武家の間に盛んに行はれて來た。これはもののふと言ふ一つの職業意識から、勢ひ戰の戰略などと言つたことに關聯して、勝敗を主にしたその遊びにもののふの道に何か與へられるものがあると言ふやうなことから來てゐるであらうけれど、一面團基の雰囲気の中に醸し出される幽玄と言はるか、そり言つた様なあのふかさが武人にびつたりくるものがあつたかも知れない。で古來の名將は好んで基局に向つたことは文獻に傳へられてゐる。

天正十年、明智光秀本能寺の變に、信長は火炎に包れて自害する前夜、六月朔日にはこ

の寺の書院に、本因坊と利玄坊を描いてその對局を子の刻すぎる頃まで熱心に觀戰してゐたのであつた。

しかるに三劫といふもの出来てその基止めとなり、拜見の衆中も奇異のことに思ひける。子の刻過ぐる頃兩僧歸路に金鼓のこゑ起る。中略……翌二日信長は御生害……三劫はこの前兆なり

と見えてゐる。秀吉も可成り好きだつたらしく本因坊と利玄坊を度々招いてゐる。局面の中央へ先を置くを太閤先といふ話がある。このやうにして敵手の眞似をすれば負ることなく、持基一目の勝となる理だと大閤自ら言つたとあるが、どうも當てにはならない話だ。

眞田昌村もよく打つたと見えて、陣中陣ありといふのか、戦地のさ中でパチリとやつてゐた。

寄手は時を移さず大手へ差向つて攻懸ると言へども、昌村少しも驚かず來福寺といふ星占を得たる眞言坊と團基して——眞田

記—
 ゐたと言ふから昌村の豪膽も相當だつたらしい。

天正十五年閏十一月、京洛寂光寺の本因坊は家康に召されて駿府へ下つた。そして

日夜城内に園基のことがあつ

たと言ふから、家康もこ

れまた愛好者だつたので

ある。それ以來本因坊は

幾度か駿府へ、そして、

家康が天正十八年八朔に

江戸へ入城してから、

度々江戸へ下つてゐる。

そして日本橋邊りの下屋

敷へ逗留してゐた。これは後の

話であるが、基所の制が作られてからは、例年

十月十七日には城内に大手合せが行はれた。

如例年基將基手合被仰付、午上刻は黒書院

出御、御下段著座上覽有之、老中若年寄も

出席

とある。そして手合が済むと御暇をもらつて

歸洛した。「十一月廿八日、園基將基の而々御暇下さる本因坊白銀十枚」など記されてゐる。話は逆になつたが、家康天下を統一して、

世は太平になつた爲で

もあらうがよ



く園基の

ことが行はれた。家康はな

かなか好きだつたらしく、名人の觀戰は言ふ

に及ばず、また諸公の邸へも出かけて行つた。

慶長十一年二月八日大御所於江戸伊達正宗

へ有御成、終日可有遊興とて、園基の上
 手本因坊、利玄、道石……以下令祇公、
 之日風烈にしてほこり座中へ吹入事甚し

— 慶長日記 —

また家康には一人の好基敵があつた。淺野彈

正長政で、彼は家康の好敵であると同時に政

治方面のよき相談役でもあつたらしい。長政

は慶長十六年に六十五歳で死んでゐるが、そ

の晩年度々召されるまゝに相手をしたのであ

る。「慶長八年七月八日壬戌昨日も今日も將

軍淺野彈正少弼御基有之」など見えてゐる。

その頃の或る夏のことであつた。本因坊は

江戸に下つてゐた。或日、早朝よりのお召に

心せくまゝ彼は登城したのであつたが、將軍

は未だ就寢中とあつて中々御前に御召がな

い。本因坊は黒書院の廣間で獨り鑢に向つて

冥想をしてゐた。やがて數刻を過ぎたが、未

だお召しの小坊主も來てくれない。

庭を照す初夏の陽ざしが眼にしみるまゝに

彼は眼を閉ちて、ちつと蠟吟に聞き入つてゐ

た。と、「坊はをるか」と割れたひくい聲が

して家康が廣櫓を供も連れずに歩いて來た。

「上様、火急の御召何事で御座ります」

と言ひも切らぬうちに家康は、

「坊！今日は彈正と一戦じや、觀戰申しつけ
るぞ」

と池に向つた廣櫓に下り立つた。そこにはは
や彈正長政が櫓に對座してゐた。長政は本因
坊をみるとにこつと笑つて顔ぢうを藏にした

「淺野様、いつも乍ら御健勝で」

と本因坊は頭を下げる。家康は長政とよくこ
の廣櫓でくつろいで對局するのだつた。書院
のやうな四角張つた廣間では面白くなかつた
のである。

「淺野！今日は黒をもたつしやい」

家康はさう言つて傍の本因坊をみた。長政
は一寸不平らしい目つきで「黒」を手にする
と、パチリと先を置いたその石に指先をつけ
たまゝ、家康と本因坊をみくらべるやうにし
て、

「殿！今日は名人の助言いさゝかも無用で、

本因坊殿しかと左様じやぞ」

と、獨言でもするやうに呟く手を放した。家

康は黙つてニヤツと笑つて石をこつた。そし
て、刻が過ぎて局が展けた。初夏の午後の陽
がいさゝかさし込んで來るのに、本因坊は傘
をかゝげて、石の動きを見守つてゐた。彼
は、「殿があそこを切ることに眼がとゞかぬ
限り上様七目の負だな、これでは今日は長び
くわい」と思ふと、先が思ひやられて黙つて
をられなくなつたが淺野がチョイ／＼自分の
顔のそくので助言どころではない。ふと彼
は傘にさす陽かげに氣づいたのであつた。
「さう／＼」と彼は心で呟くと、そつとその
石の邊りに、傘のかげを落して左右に動かし
てみた。と、家康は流石にもう氣づいたらし
い。ひよつと本因の顔をのぞくと、パチリと
そこを切つたのである。だが淺野は氣づかな
かつた。その一盤は、遂に家康四目の勝。そ
の頃、もう陽もうすれて、燭臺には燈がかゝ
げられてゐた。

城中で傘など、奇異に思ふのであるが、大
辨よりの宛所にて御墨付頂戴仕、長柄傘御
免、下乗まで乗物御免」などあるのをみると
合點がゆくのである。長政が上州眞壁で長逝

した時、家康はその死を悼むの餘り園基を止
めたので、誠に古人割琴の智は眞實なりと稱
へられたと傳へられるが、眞偽の程は保證出
來ない。

さて、先に基所の話を一寸ふれたから太田
南畝が「一話一言」の中に誌してをる基所の
ところを紹介して筆を擱く。

基所本因坊に被仰付候書付とて、人の見
せ侍りし儘しるし置ぬ。

享保六丑年六月九日例 大まにあひ堅紙圍
基秀逸之間、今般基所被仰付候向後手合
有之事、遂吟味可差計者也

佐渡守書判(板倉なり)

周防守(松平なり)

右京太夫(同)

右近將監(同)

本因坊

右於御黒書院溜御老中主殿頭(田沼なり)

列座、寺社奉行へ右近將監渡之、表御祐筆

組頭持出之、寺社奉行不殘罷出、本因坊基

所被仰付候旨

と書き止めてゐる、(終)



七彩の浴身

(岡本かの子女史)

生 田 花 世

記者は二月十九日であつたか、廿日であつたか岡本かの子女史に原稿依頼のお電話をした。ところが女史は御病氣の由を承はつたので、その日に直ぐ御見前の手紙を差上げた。しかもその翌日新聞紙上に女史の御逝去の報を見出たので、呆然としてしまった。つまり、電話も手紙も、その時には既になくなつてゐた女史宛になつてゐた譯なのである。涙がこぼれて仕方なかつた。暮れにお逢ひして十五日過ぎれば閉になるから是非遊びにお出なさいと言はれた女史の御元氣な顔がまだ眼の前にちらついてゐる。本誌には一方ならぬ御厚意を寄せられた岡本かの子女史、今知友生田花世女史に託して追悼の一文を掲げ衷心の哀悼を捧げまつる。(編輯部)

「女流歌人として又作家として有名だつた赤坂區青山高樹町三本社客員岡本かの子氏は昨年暮以來過勞のため健康を害し、湘南で療養中であつたが、歸京後

一 心臓を悪くし、去る十七日小石川帝大分院に入院、十八日午後一時半遂に死去した。享年四十七、遺言により告別式を廢し、費用は二十二日陸軍恤兵部に獻金」

略歴がついたかうした記事が二月二十四日の朝の新聞に出る前の晩、友人からこの事をきいた私は突然雷撃をきいたやうな氣がした。「アア……」と思はず發する心の叫びに、しばらくは空間を見つめた。何と云ふ急な事だらうと、衝擊のあとの心の持ち方にこまつた。

百日もたつてゐない十二月の十日前後に、女流歌人、今井邦子女史の病氣全快の紀念の會に、他にも會があつたのを切り上げて來たのですと云つて、どつしりした態々迫らざる太い聲でテーブルスピーチをした。今

井女史の全快を喜び、今後の活動をのぞみ、激勵したのであつた。その人が死くなつた。

生死は、その人その人の獨自なものであつて、死にさうな人が死なず、死にさうでないものが死ぬのだと、かねがねきいてゐた事を、こんなにも、まざまざと突きつけられて見ると、私も亦覺悟を、更に、くくり直す必要を痛感せずにはゐられなかつた。

告別式をしないといふお葉書も、夫君一平氏と、太郎と云はれる御令息との連名で、その日のうちにいただいたので、おくやみにすぐ飛んで行かうとした心をちつとおさへて考へて見た。そして弔靈だけにして黙葬しよと考へ返した。

岡本一平氏にしても、かの子女史にしても世の常の人ではな

いのだ。葬式の中でももつとも意味深い黙葬の心意氣を、私達も心から理解しなくてはならな
いと思つた。

二

葬式に行つて、これがお別れといふお顔を見たら、はらはらとこぼれる涙に、私の袖は濡れたと思ふ……。黙葬したので、流れたい涙が私の感情の芯に、凝りかたまつてゐる。かういふ経験は初めてだ。泣かしていただけるとあとがさつぱりする。そして、忘れると云つてはわるいが、何かかう心は軽くなる。泣きたいのに、涙が走り出すチヤンスを興へられないのだ。それで、毎日、毎日、岡本さんの事を、たつた一つの荷物のやうに、持ち歩く私である。四十九日頃に友人、知人相寄つての追悼會があるといふから、その日

には、このモダモダな心も何とかなるであらう……。

この頃の私は、今回のこの黙葬の心の経験で、昔、私の故郷四國の徳島で時々行はれたといふ僧の「一定に入る」といふ生葬がわかるやうな氣がする。古老の傳へるところでは、棺の中に、何日分かの水のみを入れて、その「一定に入る人」は土に埋めてもらふ……。リン、リンリン……。リンリンと、土中からの鈴の音はひびく、それが三日たち四日たつ、五日、六日と、衰へてゆき、つひには、もう誰も、二度とその鈴をきく事が出来ない。遠ざかつて行つた感じだ。鈴ふり鳴らし旅立つた感じだ。死の國へ……。その静かな事、何に比すべくもない。

ひとり居るすがし心に沁みて來るおもひはなべてまことな

るもの
ひとり居ていつくしおもふ清しさをいまいまにしてはじめ
ては知る

舊作ではあるが、私の好きな女史のこの歌の心を考へれば、御當人はさぞ清しく、死出の旅にたたれたであらう、又、一平氏は、その故にこそ有りふれた告別式のあのゴタゴタをいふたであらう。特に、今日は非常の時である。陸軍恤兵部への献金は結構であつた。私なんかの涙の問題など、大局、高處より見れば、問題にならない。生も死も葬もその人らしくてよかつたのではないか。

三

岡本かの子さんは七彩まばゆき婦人であつた。喜びも人より大きく、悲しみも人より深く愛も人よりはげしく、憎みも人よ

りは強かつた。そして、智も、才も、徳も、人よりはぬきんでてゐた。

その事實を一つ一つあげてゆく事は、紙面がゆるさないから他の機會にするとして、人間として、女性として、普通の女、私たちよりも三桁も五桁も上の生活をした人だつたと思ふ。

いつか、一平氏が「妻のどの點に牽かれて結婚したかの答へ」といふ文の中で、女史が處女時代に、何か御自分の肉體のことを、考へるだけ考へて、チヤンと、不具だときめて了ひ、そこから獨身を決心してるのを見て、はじめは驚き、次は呆れ、つひに、いとしくなつて了ひ、「こんなべらぼうな誤解から獨りで暮すつもりである女の世間知らず自分は男としてのいとしさが猛然と起つた」と書かれた

ものだ。

感じると、極端まで感じ、考へ出すと、何日でも考へる。やらうとなると、いつまでも喰ひ下つてやる。中途半端といふ事を、この人は、御自分の生活から追ひ出してゐた。些事にまでもさうであつた。だから現代文明の一特質である中途半端のおよそ反對であつた。一例をあげると、この人の電話だ。自分の氣のすむまで、何通話でもぶつとほした。だから、聴き手は、まるつて了ふ。某女史なんかは、岡本さんからお電話だときくと、女中にまづ、電話口の下に、椅子を持つて來させて、それから受話器を耳にあてる事にしてゐたといふ。これは斷じて、私の作り話ではない。「張合のある必需品」といふ點で、一平氏が次のやうにも書かれた。

「一口に云へば睿智なる童女をそのまま成長させたものといつた感じですよ」

「とにかく躊躇なく第一番に云へることは私はいつでも女史にインスパイヤされるといふ事です」

四

小利口な現代文明とはおよそ

反對の性格を持つて、従つて、その生活と藝術とを、和歌で、隨筆で、小説で、戯曲で、講演で、お臺所で、交際で、何のこまかしもなく、四十七年生き切つた岡本かの子女史は、その全生涯で、現代文明を非難し、かつ批評した。天才として、その立脚點から活動した。天稟の正氣の狂氣が、今のやうな時代に、警告を發するものとなつた。かゝる見なければ、女史の生活と藝術とはわからないのではないだ

らうか。

女史が一番自信をもつたといふ歌集「浴身」といふ題について、その當時、次のやうに書かれた。

女「ややもすると、私がおしやれで、入浴とか浴泉とかから來る一種のエロチックなものをねらつたやうに解する人が多いやうですが、あれは禪の方から來てゐますので、自分では深く考へてつけたものです。心身禪脱、つまり各時代の都風の垢に浴した心身を洗つて、再びそこに現した、さういふ氣持から來てゐるんです」

かういふ女史であつたから、死はこの人の大禪脱でなくて何であつたらうか。佛教により大往生をした娘の枕元に、旭日波濤を昇るの軸をかけたといふ或るお父さんのやうに、私たちも、

岡本さんの大禪脱を、日の出の如く明朗に考へるのがいいのではないだらうか。

終に、女史の略歴をつけ加へる。

「女史は東京府下二子玉川の大和屋といふ素封家の令嬢、赤坂區青山高樹町で生れ、跡見高女卒、和歌は十四、五歳の頃からはじめ、雑誌「明星」等に絶えず發表してゐた。二十三歳の頃岡本一平畫伯と結婚、其後佛教哲學の研究をはじめた。歌集では「浴身」小説では「焰は病みき」「母子叙情」宗教書では「觀音經を語る」等の多くの著書があり、最近「生々流轉」「丸ノ内挿話」等を執筆中であつた。昭和四年夫君令息と共に外遊、ロンドンではペンクラブの會員に推挙された。」



正信への願望

— 日常勤行式解説 —

中村 辨 康

(六) 開經偈 (如來の正法を頂く爲に)

無上甚深微妙法

百千萬劫難遭遇

我今見聞得受持

願解如來眞實義

無上甚深微妙の法は、百千萬劫にも遭ひ遇ふこ

と難し。我今見聞し受持することを得たり。願

はくは如來の眞實義を解せん。

(意譯)

味へば味ふほど愈々益々その義理は深くなつて、到底言葉を以ては云ひ現はすことの出来ない微妙な御教、それは正しく菩提を得るところの御法であるが、例へば百千萬劫と云ふやうな永

い間、生き替り死にかはりしたところで、それに遭遇することは極めて難かしいことだと承つて居ります。

然るに、何う云ふ深い因縁の然らしめたものでせうか、私は今、其甚深微妙のみ法を見聞きすることが出来たのであります。

此うれしい千載一遇の好機を逸しましてはまたと再び御教に臨することは出来まいと思ひますので、如來様のみ法の最も正しい眞實なる義理を心に深く／＼諦め領解したいものと念願致します。

講 贊

人と生れては、いたりに人間としての喜びを感じ、人生の最大最要の問題である「生死」の謎を解決し、心ゆくばかり人生を味ひ行くことは、誰人も人である限り望んで止まないところのもので

なければならぬ。

然し、其道は容易に獲らないのである。

第一に私達は餘りにも本能に引きづられ過ぎて居るのである。

第二には餘りにも個人主義の根本概念たる個在思想の捕虜となつて居ることに馴れ過ぎて居るのである。

此二つの理由で私達は私達の本當の姿を知らず、本當の人生を味ふことも出来ないのである。だから佛教では第一の謬を是正すべく「戒」を以て生活を規律あらしめて煩惱の伏滅を圖らうとするのであり、第二の誤に對しては「定」を以て暫く外界の事物に引かれ行く心の動搖を停止せしめて「天地同根」の事實に直參せしめ以て眞實の姿にめざめしめんとするのである。

けれども夫は非常の努力を要することであり、且つ古來から多くの人々が失敗し續けたことでもあるから、其自分中心の修養法に替へるに、對外的な布施行忍辱行を以てしやうとしたのであつた。

布施行は一切を「預り物」として私達の貪欲心を抑へ利他的な無我心を養ふところの修養法である。

また忍辱行は他からの辱めに對してもよく之を忍ぶは勿論、寧ろ進んで他の苦を代つて受けんとするところのもので、私達の瞋恚心を押へ大乗的な慈悲心を長養せしめんとする實踐法である。

然し之も亦た多くの人達が失敗して來たものである。かの釋迦教團の上首と稱せられた舍利弗が乞眼婆羅門に自分の美しい眼を乞はれ兩眼ともくり抜いて與へた時、其罵りに會つて遂に瞋を發してしまつたと云ふ話の如き其一例である。

また此の意志的な修養法に代るに理智的修養法として、法華經には釋尊が世に出興せられたのは「一大事因緣」の爲であり、其一大事因緣とは一切衆生をして「佛知見」を開示悟入せしめんとするものであると教へて居る。即ち「佛知見」を開き「佛知見」を示し「佛知見」を悟らしめ「佛知見」に入らしめんと云ふのである。然かも其「佛知見」とは畢竟「菩提」に外ならないものである。法華經要解に「此の眞知見は生佛（衆生と佛）に等く有りて本來清淨なり。唯だ人は妄塵（煩惱のこと）に染せられ無明（根本的な惑ひ）に覆はるゝを以て而も自ら迷失す。故に佛は爲に開示し其本來清淨なるものを得て、而も自ら悟入して復た迷失せざらしむるなり。開とは無明の封部を破し、示とは所迷の眞體を指し、悟とは豁然として洞視し、入とは深造自得して而も一切種智（差別あるところの一切の事相を視る智）を證するなり」と云つて居るが、然らば其佛知見を何う開示悟入するかと云へば「空假中」の三諦の理を觀法し徹見するにあると云ふのだから、謂はば之は「理智開發」を目的として居るものである。

だが、これもまた失敗に終つたのである。法華經を最もよく理

解して「智者大師」とまで推奨せられた天臺智顗大師にして尙ほ臨終の時、弟子の智朗が

「お師匠様は菩薩の位として何處に居られるのですか。そしておなくなりになつて何處にお生れになられるのですか」と尋ねたところ

「私が若し弟子を持たなかつたら屹度六根淨（内凡十信の位）を得て居たであらうが、弟子を持つた爲めに己を損して只是れ五品位（十信位の前の外凡弟子位）のみである。また汝は私の生所をきいたが、私は今ま私の師友が皆な觀音様に侍從して來て私を淨土に迎へて呉れて居るのを見る」

と云つて右脇西向して専ら彌陀觀音を稱念したと傳へられて居る位であるから、他は押して知るべきである。

だからそれらは高遠なる理論を教へ嚴肅なる規律を教へ幽微なる精神訓練を教へるのみであつて、誰でもが普く最後の目的にまで到り得ると云ふ譯ではないやうである。

ところが大無量壽經に依れば三界の衆生は事實上皆な戒定惠の三學の修行に堪えないところから

「如來は無盡の大悲を以て三界を矜哀す。所以に世に出興して光く道教を闡き、群萌を拯はんを欲して惠むに眞實の利を以てす。無量億劫にも値ひ難く見難し。猶し靈瑞華の時あつて乃ち出づるが如し」

と釋尊が世に出られた「謂ゆる出世の本懷」としては大慈悲の心に基き、三界の中の有りと有ゆる人々を救はうとしたからであると云つて居る。即ち曩に云ふところの戒定惠の三學に堪えられない者をして、皆な悉く人間最終の理想としての「菩提」を貫徹せしむべく、「眞實の利」として、阿彌陀佛の大悲本願を示し、「戒」とか「定」とかの修行以外の途として「信」と「念」との情意を中心とする簡易な實踐法を明かにし給うたのであると云ふのである。

して見れば此淨土門の方がより大乘的であり、より一般的であつて、云はゞ能率のあがる實際法門である譯である。

だから聖道門は難行道であつて宛も山坂を越え艱苦缺乏に堪えつゝ行く徒步旅行のやうなものであり、淨土門は易行道として親船に乗つて樂々と目的地に行きつく船旅のやうなものであると云はれるのである。即ち理智の研鑽や意志的訓練に依らねばならぬのと、感情的に情操を高めて行くのとの相違である。

ところが中には「信」と云ふことも謂ゆる「難信の法」である和阿彌陀經などにも云はれてあるやうに、頗る困難なもので、中々容易に「信」に到達することが出来ないから、云はれる如き「簡易道」ではないではないかと云ふ人もある。

無論從來心の中核となつて居たものが、すっかり置き換へられて「信」と云ふ精神状態になるのであるから、其精神轉換は何か

特別な感激か衝動かを覺えなくては容易に起るものでないことは云ふまでもないけれども、然しそれは急激に變化する場合を云つたものであつて、一般的に即ち「漸機」と云はれる多數の人々には漸進的に進む「念」と云ふ方法が興へられて居ることを知らないからそんな議論も出て来るのであらうと思はれる。

然し「念」の實踐と云ふことには廣い意味があつて、禪宗の「公案」の如きも一種の「念」に相違ないのであるが、それは自力の「念」であるから、他力教の「念」とは外形は似て居ても内容が違ひ目的が違つて居るのである。即ち

念
 自力的「念」——公案(念法)——禪定を目的とす——精神訓練法
 他力的「念」——稱名(念佛)——信仰を目的とす——信仰増進法

自力の「念」は自分で自分の心を開かうとするのであり、他力の「念」は自然に自己が掘り下げられて他力の尊さを仰ぎ得る心境にさせられるのである。

もつと具體的に云ふならば、信仰なき人でも毎日念佛を續ける居るならば、必ず何時とはなしに信仰に引き入れられて居ることを氣付くに至るのである。「信」の正面からすれば「難信」と云はれるものかも知れぬが、側面の「念」から攻めれば容易に「信」の中に追ひ入れられてしまふのである。だから「易行道」なのである。況して「難易二道」の聖賢は聖道と淨土との比較の上に就

て云つて居ること、聖道門に比して、淨土門の易行易修であることは云ふまでもないのである。

誠に「正法」に遇ふことは難中の難であつて、餘程の好因縁に恵まれなくては到底「教」に際會することは難いのに、偶々茲に遭遇ふことが出来たのだから、此好因縁を喜ぶにつけても、尙ほ一層如來の眞實義を體解して、信仰の増進を圖るやう努力しなくては、誠に以て冥加に盡きると云ふものである。

善導大師は

「たとへ大千世界に滿てらん火ありとも、法を聞く爲には直ちに其大火の中を突き過ぎて如來の御名を聞いて信仰に入るべきである」

と勸めて居られるし、また其次には

「佛に値ふことは難い事であるが、人々に信慧あることも亦た極めて至難のことである。更には此の佛の教の中でも易修易行である希有の法に遇ひ希有の法を聞き得ることは、最も至難なのである。然かも今は自ら信じ、人に教へてまでも信を得せしめやうとして居るのである。是こそは全く「難きが中にうたゝ更に難きこと」であるにも拘らず、その「難中轉更難」の信に到り得たのであるから、廣大なる如來の大悲を出来る限り大勢の人々に傳へたいと思はざるを得ない。またさうすることこそ本當に佛恩に報ひ奉ることが出来る」と云ふものである」

と云つて居るが、寔に同感に堪えない次第である。

だから私達がいま折角此の尊い「念佛の御法」に遇ひながら善い悪いのと勝手な文句をならべて信仰に入るべき努力を一日のばしに延ばして居るならば、全く贅澤千萬な話であつて、極言すれば誠に「罰あたり」と責められたとて云ひのがれは出来ないのである。

いま假りに世界中に十七八億の人が居るとして、幾分でも佛教思想の影響を受けて居るものは精々五六億に過ぎないであらうが其中で直接間接關係を持つものは一億位か何うかそれも疑問である。然かも曲りなりにも「佛教信者」と云はれ得るものは、日本、朝鮮、蒙古、滿洲、支那、安南、シヤム、ビルマ、セイロン、それに若干の歐米人で、其中最も純粹の淨土教關係は日本佛教徒の約半分弱と支那佛教徒の若干位のものである。更に其中で兎にも角にも正しい念佛の法門を聞き得たものは幾人位であらうか、誠に寥々たるものではないかと思はれる。

こんな數字のことは根據も何もない事で何うでもよい事ではあるが、正しく念佛の御法を聞き得たものは、實に何十萬人中の一人何百萬人中の一人か判らないと云はざるを得ない。

善導大師は

「若し人、善本なければ佛名を聞くことは出来ない。例へ聞き得ても驕慢と懈怠と懈怠との人は信仰に入れない。

また前の世に佛様に遇つた事がなければ、此念佛の信仰には入れない。

だからいま彼の彌陀の名號を聞くことが出来た限りに於ては、大に喜んで、たとへ一聲でも南無阿彌陀佛と唱へて信仰に入るべきである」と云つて居られる。

私達が如來様の御法を聞き得ないならば止むを得ないことであるけれども、若し聞き得たならば、是非之を正しく受け取りたいものである。そしてまた正しく受け得た限りに於ては之を正しく信じたいものである。

いざさらば、之から私達は如來の御經を讀誦させて貰いて其眞實の義に觸れ、そして其眞實の義を領得するやうに努めやうではないか。

私達はもう一邊からした氣持で此の開經の偈を讀誦しやう。無上甚深微妙の法は百千萬劫にも遭遇ふこと難し、我今見聞受持する事を得たり、願くは如來の眞實義を解せん。

(字解)

微妙法——幽玄を微と云ひ難思議を妙と云ふ。維摩經には「微妙是れ菩提なり、諸法知り難きが故に」とあるから「菩提を得る道」と理解される。

劫——梵名「劫波」の略で大時又は長時と譯し普通の年月を以ては算出し得られない悠遠の時間を示す言葉である

見聞

磐石劫芥子劫の譬喩を以て説明して居る。大中小劫阿僧祇劫などの區別もある。

目に佛を見、耳に法を聞くを「見聞」と云ふが、今は目に佛經を見、耳に佛經を聞くことを得たるを云つて居るのである。

また「見聞覺知」と續ける時は眼の働きを「見」、耳の働きを「聞」、鼻舌身の働きを「覺」、意識の働きを「知」と云ふ。

受持

心に領受するを「受」、憶持して忘れざるを「持」と云ふ。信力を以て「受」、念力を以て「持」するのが本當の

「受持」である。

眞實義

「眞」は眞正、「實」は中實で虚妄にあらざるを云ふ。

眞實義に二種四種の區別があるが、之れは世間的な眞實と佛智の上の眞實とを別けて云つたものである。

今云ふところの「眞實義」は如來の眞實義であるから本當の菩提を覺し涅槃を實踐して得たところの眞實の教のことであること云ふ迄もない。

解

會得し理解する事であるが、唯だ理論的に理解するばかりでなく體に理解し心の奥まで理解し體驗するを「勝解」又は「體解」と云つて居る。ものを理解するにはそこまで行かなくては本物ではない。

S.S.S.

金はンベ金
亂にンベ金
賣優にンベ金
すで

金合スエンサる
！をンベ



¥150以上

筆年萬合金・スエンサ ★

編輯部だより

◆本誌でわが「浄土」も創刊以來満四ヶ年、発行號数は四十八號全く早いものです。その間部數に於いては勿論、内容に於いても教界に比肩するものなき第一流の雜誌となりました。一重に愛讀者並びに御後援各位の絶大なる御支援の賜と感謝感激の外はありませぬ。

◆第一回「浄土讀者の會」も別項記載の通り豫想外の大成功で本部長一同限りない喜びに満され、今後の活動を期して張り切つてをります。御來會各位に紙上より厚く御禮申上ます。

◆陽春の訪れと共に躍進に躍進重ねて行きます。

◆本誌は「法然上人物語」を特輯としました。久しく特輯物を出しませんでした。上人御誕生の

四月七日のよき日を記念してこの特輯は意義あることゝ信じます。

◆特輯にはこの顔觸れの外に上人の末裔立石欽一氏、誕生寺御住職漆間徳定師の稿も頂く筈でありました。共に事務御多忙のため遂ひに〆切に間に合はず、次の機会に譲ることゝ致しました。

◆この特輯を御讀みになれば上人の御生涯、御求道の跡を平易にうかがひ知ることが出来ると思ひます。

◆今月は編輯の都合上、鐵脚運動ニユース、讀者の聲を割愛いたしました。原稿は澤山そろつてをりますから、來月の紙上でお目にかけます。

◆來月は本誌創刊以來第五年の第一月に當りますので、紙上にもそれを記念すべき意義ある催しをしたいと思つてをります。

(道)

◆本會出版物の御注文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番

◆御注文の場合は種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さいますやう。尚送料をお忘れなき様お願い致します。

◆勝手乍ら代金引換は一切お断り申上ます。

◆その他お問合せは往復はがきかまたは返信封同封で、御願します。

◆本誌掲載の廣告は一切左の店で取扱つてをりますから廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひます。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社

東京市京橋區銀座西七丁目
電話代表銀座 五七六六

浄土 四月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和四年三月十日印刷納本
昭和四年四月一日發行

(定價十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町二ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人讀仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「浄土」購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料五厘)

一ヶ年 金一圓
(送料不要)

會費

我が信仰

四六判二色刷表紙付
定價六錢（送料三錢）
二十部以上一時に購入
の方には一部五錢とす。
法然上人鑽仰會編

法然上人鑽仰會編

信	念	懺	本	知
仰	佛	悔	願	恩
郁芳隨圓	武者小路實篤	吉田絃二郎	佐藤春夫	岡本かの子

文壇の巨星が語る信仰の體驗！

この時代の信仰は？ 念佛の眞骨
頂は？ 法然上人は？ 文壇の巨星
が隨筆風に表現された、新鮮な信仰
の言葉は何人の胸にも法悦の燈びを
點せずにはおかない！

この内容、この定價！本書こそ布
教用書の最高峰を行くものである！

振替東京芝公園二八一二七八
東京芝公園二八一二七八

會仰鑽人上然法・所行發

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十四年三月廿日印刷納本 昭和十四年四月一日發行

淨

土 第五卷 第四號

定價金十錢（送料五厘）
滿鮮臺等
外地定價金十一錢